



第66回特攻平和観音年次法要
(世田谷山観音寺特攻平和観音堂)



第117号

公益財団法人 特攻隊戦没者
慰霊顕彰会

編集人 金子敬志
発行人 石井光政
印刷所 島根印刷株式会社

目次

第66回特攻平和観音年次法要祭文	藤田幸生	2
第66回特攻平和観音年次法要	金子敬志	3
世田谷区長ご挨拶	保坂展人	5
慰霊祭等参加報告		
第58回出水市特攻碑慰霊祭	岩崎茂	6
能代市特攻慰霊祭・秋田県特別攻撃隊招魂祭	石井光政	7
第五十回若櫻の碑慰霊祭	及川昌彦	10
第47回指宿海軍航空基地「哀惜の碑慰霊追悼式」	衣笠陽雄	12
平成29年度義烈空挺隊慰霊祭	衣笠陽雄	13
殉國沖縄學徒顕彰祭72年祭	白田智子	16
第19回十三塚原特別攻撃隊慰霊祭	及川昌彦	16
国分(第一・第二)基地跡研修	金子敬志	18
平成29年度市ヶ谷台慰霊祭	倉形桃代	21
千玄室氏講演会及び献茶式	水町博勝	24
特別寄稿「鹿屋平和祈念献茶式」	金子敬志	29
月例法要報告(7~9月)	海上自衛隊第1航空群司令 中村敏弘海将補	29
会員投稿		
第七二三海軍航空隊神風特別攻撃隊彩雲隊	森田禎介	35
海軍特攻隊第五七生隊「森丘哲四郎手記」余聞	藤田幸生	39
特攻隊員を追い悼む その5	蒼蒼子	40
顕彰会講演会「父と母の生きた時代」	及川昌彦	42
事務局からの報告等		
会報『特攻』第116号正誤表		42
報告・連絡等		43
挿絵提供	空自OB 宇山氏	

「祭文」

今年もまた、ここ世田谷山観音寺特攻観音堂の御前に集い、陸海軍全特攻隊戦没者年次法要が、このように平和平穩のうち、盛大に催行できますことを、ご英霊の皆様感謝申し上げます。

ここに集いました一同は、遠路、既に昨日から行動している方、海外からの方も居ります。戦友や御遺族の方々は、ご高齢になり、様々な支障を乗り越えて出席して居ります。戦争を知らない若い世代も参列して居ります。全て、皆様方を想う気持ちからであります。

七十有余年前、皆様方は、我国存亡の危機に際し、身を捧げてこの国をお護り下さいました。ここに心からの感謝と哀悼の誠を捧げます。

その結果は、その時、国は敗れましたが、国体は護持されました。生き残った私たちは、その後、一生懸命努力し、皆様方が残してくださったこの国を、廃墟から復興発展させ、平和を護ってまいりました。今では、世界の重要な国家に復活し、世界人類平和発展のために貢献しております。

しかしながら、戦後七十有余年が経過し、近年の世界情勢は、大きく変動してまいりました。人類活動の場が、宇宙やサイバースペースに拡大してくる一方で、多大な犠牲の下、戦後成立した世界平和維持の枠組み、すなわち「国際連合」「NATO」、 「ASEAN」、 「EU」

等が、ほとんど機能しなくなってきたように観えます。更に、東西冷戦に代って生じた、米、中、北朝鮮の相克、及び、新たに「イスラム国」等の国際テロ組織等の活動が活発化してきており、総じて世界は、拡散、流動、分裂、不安定化の方向に動いているように観えます。

国内を觀ましても、政治、経済、マスコミ、更に加えて、外交、教育等の分野までも、官民共に、日本の伝統的な「和」のありようから、遠ざかってきているように観えます。

私達の周りも、核家族化、少子高齢化が進み、人口の都市集中、田舎での勤勉な働き方が廃れる等、社会の営み方、価値観が、大きな変化を来たしてきております。加えて、近年、人類の活動する新しい分野である「宇宙やサイバー空間」の管理体制は、法の整備も含めて未完成的であります。

このように、わが人類社会は、表面上、平和、平穩に見えますが、各方面で、激動、激変の時期に入ってきております。私たちは、知恵を絞り、なんとしてもこの国や人類の難局を、無事に乗り切っていかなければなりません。それが、生き残って生を繋いできた今を生きる私達の、皆様に対するなさねばならない義務であろうと思うからであります。

私達は、個を犠牲にして国を護つて下さった皆様方のことを忘れることなく、その末裔として恥ずかしくないように、国の存亡を賭ける覚悟で、道を切り開き、平和で明るい、より充実した人類世界実現のために、前進していくこと、このことをお約束して祭文と致します。

どうか、ご加護をもって、私達を見守りください。そして、安らかに眠り下さい。

平成29年9月23日

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田幸生

第66回特攻平和観音年次法要

日時 平成29年9月23日(土)

秋分の日 14時～15時20分

場所 世田谷山観音寺・特攻観音堂

参列者 ご遺族26名、ご来賓33名 会員155名 当日参列41名 合計255名

一 式次第

司会 大穂 園井

倉形 寛

梵鐘点打 3回 世田谷山観音寺山主

駒繫神社宮司

国歌斉唱 トランペット 堀田 和夫

山主願文 特攻平和観音経

世田谷山観音寺山主 太田 賢照

紳 儀 駒繫神社宮司 澤田 浩治

修祓の儀・降神の儀・献饌の儀

詔詞奏上・玉串奉奠・撤饌の儀

祭文奏上 公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 藤田 幸生

挨拶 世田谷区長 保坂 展人

献 吟 一誠流吟詠 吉野 一心

龍笛 逢坂 龍信

奉納献奏 甲飛喇叭隊第11分隊

隊長 原 知崇

慰霊献歌 全員合唱

トランペット

堀田 和夫
堀田 ともみ

「加藤隼戦闘隊」 「若鷲の歌」

「海ゆかば」

玉串奉奠 顕彰会会長、ご遺族代表

ご来賓代表

焼 香 ご遺族・ご来賓各位

会員・一般参列者全員

式衆退堂

池前祭 山主読経、神官 修祓

祝詞奏上後 式衆退場

直 会 15時30分～16時45分

献 吟 吉野 一心

笛 逢坂 龍信

神風特攻隊第9金剛隊 石塚 茂

昭和19年12月15日 ミンドロ島周辺で戦死

たらちねの母の御教え一すじに

我は征くなり南溟の空

一誠隊 都留 洋

昭和20年1月4日 キュウヨウ島付近で戦死

生も死も心ぞ楽し散りて尚

すめら御楯とならむ我が身は

二 概要

平成29年9月23日(土) 秋分の日、第

66回特攻平和観音年次法要が、世田谷山



特攻平和観音

観音寺特攻観音堂において催行された。

前週の子報では降水確率が50%～60%であった。昨年の年次法要は、雨天の中の準備作業開始になり難渋した事を思いだし心配したが、予報が好転し、当日は夜来の雨も上がり、ややぬかるむ所もあったものの、時々日も差すようになり、11時過ぎには準備作業を完了。支援員は思い思いに昼食を頂き、午後からの受付に備えた。

開始時刻が近づく頃にはほぼ満席となり、定刻の14時きっかりに梵鐘が3回点打されて法要が開始された。

定刻に法要が終了し、その後、直会となった。直会は旧交を温める方々や初対面のご挨拶をする方々などで話が弾んでいたが、時刻となったので、来年の再会を約して第66回世田谷山観音寺年次法



山主願文

願彰会理事長の祭文奏上に続いて世田谷区長がご挨拶をされたが、本会が刊行した「森丘哲四郎手記」から、平和の大切さを述べられたのは印象的であった。慰霊献歌の伴奏は、毎年ご支援頂いている堀田和夫氏と共に、今年も御嬢さんの堀田ともみさんの合奏となり、例年以上の厚みのある演奏であった。



願彰会理事長祭文奏上



駒繫神社宮司神儀

要は散会となった。(金子 敬志 記)



堀田和夫父子のトランペット合奏



世田谷区長ご挨拶

「世田谷区長」挨拶

世田谷区長の保坂展人です。第六十六回特攻平和観音年次法要にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

戦後七十二年が経過し、戦争の記憶を後世に継承していくことがますます難しくなる中、私にとつても平和の大切さと、命の尊さを改めて思い出させてくれる日が再びめぐってまいりました。

私はこの法要にて残されたご遺族をはじめ多くの関係者の皆様とともに、短すぎる人生の入り口で生命を投げ出していった特攻隊員の運命に思いを馳せることを大変貴重な機会だと感じております。

そんな思いを一層強くするきっかけとなったのが、ひとりの青年の遺稿をまとめた一冊の本との出会いでした。真珠湾での開戦からちやうど二年後の昭和十八年十二月八日に学徒出陣し、昭和二十年四月二十九日に鹿児島県の鹿屋（かのや）海軍航空隊から沖繩に向けて出撃した一人の特攻隊員森丘哲四郎さんの手記です。

東京農業大学で学びながらラクビーに打ち込んでいた若者が戦況の悪化とともに学徒動員され、決して十分とは言えない短い訓練期間の後、実戦に配備されていきます。手記は入隊前の農業実習時代に始まり、出撃の三週間ほど前までのもので、日々の暮

らしや訓練の様子から特攻直前の心情まで、一人の若者の足跡が飾ることのない、率直な言葉で綴られています。

素朴な言葉だからこそ、かえって行間からさまざまな思いが汲み取れます。お母様に「体に気をつけてね」と送り出された出征のときは「少し淋しくして」いて、他の大勢の見送り中でも「一人ぼつねん」としていたという青年は、入隊後の教練の間にも面会に来た母や姉との会食を楽しみしていました。

一か月半後には飛行学生に合格し操縦士としての訓練が始まると、その三週間後には「栄光の元に死なん」との覚悟を記します。一方戦況の悪化はかなり正確に届いていたようで昭和十九年二月には「戦いは負け戦だ」との記述も見られ、玉砕という言葉も頻繁に登場します。

やがて海軍少尉に任官したところで昭和二十年二月二十二日に海軍特別攻撃隊員に選ばれ、「一大記念すべき日なり。何たる喜びぞ。光栄無上絶対なり」と勇敢の言葉が続きますが、やはり出撃が近づくと一人の若者としての本音がうかがえます。

「今日は故郷の村の祭りの日だ。子どもの頃の思い出が尽きぬ。あの御社、あの鳥居」といった望郷の念が募ります。そして出撃命令を受けると両親に「幼児大

病に侵さるる事数度、死境を歩む事三度、両親様の深き愛以って今此處（ここ）にあります」と感謝の念を記します。こうして出撃し、二十三歳で帰らぬ人となったので

こうして、あまりにも短い生涯を終えた青年が残した言葉は、戦後の日本に生まれた私の胸に迫りくるものがあります。

ひとりひとりの若者らしい将来への夢や、あこがれの職業もあつたことと思います。そのすべてを投げ捨てて、戦局打開のためにと大空に散っていった瞬間を思うと言葉を探すことができません。ご冥福を祈るばかりです。

私たちは平和の価値を大切に次世代に伝え、二度と戦争という惨禍を招くことのないよう恒久平和の実現を目指し歩んできました。国際情勢がかつてなく緊迫する今だからこそ、改めてその想いを強く刻むものです。

改めて戦争の犠牲となられた方々への哀悼と、その後のわが国の復興を成し遂げた多くの先人への感謝、そして永遠の平和を希求し行くことをお誓いして挨拶といたします。ありがとうございました。

平成二十九年九月二十三日

世田谷区長 保坂 展人

第58回出水市特攻碑慰霊祭に参列して

副理事長 岩崎 茂
 評議員 及川 昌彦

一 慰霊祭の状況

平成29年4月16日(日)出水市特攻碑
 顕彰会(会長渋谷俊彦市長)主催による
 第58回出水市特攻碑慰霊祭が出水市特攻
 碑公園にて開催されました。岩崎茂副理
 事長とともに市長主催による前夜祭であ
 る交流会から参加させていただきまし
 た。遺族・元隊員・自衛隊鹿兒島地方協力本
 部・自衛隊父兄会・出水市議会議員・商
 工会議所など40名ほどの和気藹々とし
 た交流会でした。



前夜祭

来賓として遺族会会長である尾辻秀久
 議員が出席されていきました。地元の方々
 のアトラクションの後、壇上で同期の桜
 を合唱して明日の慰霊祭の成功を期して
 散会しました。

翌16日11時より第58回出水市特攻碑慰
 霊祭が陸上自衛隊国分駐屯地の儀仗隊・
 音楽隊と消防団による国旗・軍艦旗掲揚
 で開式しました。遺族代表として毎年フ
 ランス在住で駆けつけた亀井昭子氏(菊
 水部銀河隊鎌倉基茂海軍大尉姪)による
 供花に続いて参列者全員が供花し、渋谷
 俊彦市長による慰霊のことばがあり、音
 楽隊による記念演奏の後、全員で同期の
 桜を合唱しました。渋谷俊彦出水市長を
 中心に海上自衛隊・陸上自衛隊・消防団・
 遺族・戦友・市民が一体となった素晴ら
 しい慰霊祭でした。直会は、この慰霊祭
 を支えて昨年亡くなられた竹添二雄元副
 会長の自宅にて行われました。その途中
 で特攻神社を見つけましたので立ち寄り
 参拝してきました。

(及川 昌彦 記)

二 所見

私は、今回初めて鹿兒島県出水市で行
 われた「特攻碑慰霊祭」に参加させて頂
 いた。今回は第58回目であり、前日の交
 流会そして当日の慰霊祭が渋谷出水市長
 の主催で執り行われた。既に終戦から七

十年以上経過し、ご遺族の参加も少なく
 なる中で、地元の方々や自衛隊関係者が
 多く参加し、交流会は寸劇も含め和やか
 に、そして慰霊祭は整齊と執り行われた。

私は、この二日間を通して、渋谷市長
 及び市役所の方々、尾辻鹿兒島県遺族会
 会長をはじめとするご遺族の方々、そし
 て地元の商工会議所の多くの方々の特攻
 で亡くなられた方々を慰霊し、後世に彼
 らの御遺志を伝えていく強い意志を感じ
 させられ、我々、特攻隊戦没者慰霊顕彰
 会もこれまで以上に我々の活動を充実・
 活発化させる必要があることを痛感させ
 られた。

(岩崎 茂 記)



慰霊祭遺族席

能代市特攻慰霊祭・秋田県特別攻撃隊
招魂祭に参列して

評議員 及川 昌彦
理事 石井 光政

一 慰霊祭・招魂祭の状況

平成29年4月28日(金)能代八幡神社の特攻勇士之像前で開催された、秋田県能代市特攻慰霊祭に石井光政事務局長と参列した。当日は桜が残る中、代表の武田安一様(陸士60期)を中心に関係者10数名で能代八幡神社宮司による神事が実施された。宮司による祝詞奏上の後、武田代表、石井事務局長、参加者それぞれが玉串を奉奠し、慰霊祭は厳かな雰囲気の中、滞りなく終了した。その後場所を移して武田氏の司会で懇親会が実施され、今後のこの慰霊祭の方向性について活発な議論が交わされた。秋田市内に戻る途中、秋田県護国神社を表敬訪問し春季例大祭の前夜祭に立ち会うことが出来た。翌平成29年4月29日(土)、秋田県総社神社において開催された第26回秋田県特攻隊戦没者招魂祭にも参列した。雨天だったため拝殿内での開催となった。開式の辞の後、昭和天皇武蔵野御陵遥拝、国歌斉唱、「国の鎮め」のラップ吹奏の下、英霊に対する黙祷、神前神楽奏奏を含む神事、元土浦海軍航空隊で夜間戦闘機「月

光」搭乗員だった藤本光男氏による追悼文朗読、碑文朗読、大西中将遺書朗読の後、「同期の桜」のハーモニカ伴奏での玉串拝礼、聖寿万歳後、全員で「海ゆかば」を合唱して終了した。

慰霊祭後は会場を移動して予備役ブルーリボンの会主催「自衛隊幻想」出版記念シンポジウムが、司会を予備自衛官で女優・ジャーナリストの葛城奈海予備三等陸曹の下、荒谷卓元一等陸佐、伊藤祐靖元二等海佐、荒木和博予備陸曹長をパネリストとして行われた。(及川昌彦 記)

二 能代・秋田特攻隊慰霊祭参加所見
○能代

初めて参加した能代市の特攻隊慰霊祭。ここ能代市は旧陸軍東雲飛行場があったところで、多くの若者が訓練に励み、ここで育った勇士が日本の防衛のため各地で戦い散華された。また訓練中にも志半ばで殉職された隊員も多く、今でもその時の状況を克明に覚えて語って下さる方がご存命で、この方たちが中心となって英霊の慰霊祭が毎年行われてきた。その中で「あゝ特攻勇士の像」が能代市八幡神社に平成20年に奉納され、以後毎年東雲飛行場出身で亡くなった方と共に特攻隊員の慰霊祭が行われている。

慰霊祭当日は天候にも恵まれ、東京では散ってしまった桜の花が満開で出迎え



能代八幡神社宮司による神事



正面から見た能代八幡神社

介する。

「追悼文」

てくれた。代表の陸士60期の武田安一氏の玉串奉奠に引き続いて我々も顕彰会を代表して玉串を奉奠し、その後参加者全員の奉奠等粛々かつ厳かな心の籠った慰霊祭であった。慰霊祭後は場所を移して懇親会が行われ、参加者の慰霊祭に対する想いや、戦時中の体験談等をお聞きし、かつ、今後どのように慰霊祭を続けていくか等の意見交換も活発に行われ、実のある懇親会であった。

慰霊祭にも参列した阿部輝忠様の車で秋田市内まで送って頂いたが、その途中でまだ雪を頂く鳥海山が綺麗に見えた。鳥海山が綺麗に見える時は次の日は雨と聞き、山が見えたら晴れと思っている神奈川在住の私には不思議な感じであったが、案の定、次の日は雨であった。

○秋田
雨に煙る秋田県総社神社にて「特別攻撃隊招魂祭・昭和の碑記念祭」が執り行われた。雨のため、本殿内にて行われたが、式次第に従って済々かつ厳かに行われ、英霊に対する感謝の念を再度強くする素晴らしい慰霊祭であった。その中でも旧軍出身の藤本光男様の追悼文は亡くなった同僚に思いを致す感銘深い内容であったのでご本人の了解を得てここに紹介する。

今年も4月29日を迎えた。「また来たぞ山本。笑うな桑野。俺だ、藤本だ」

八十歳を過ぎると人の顔は変わる。一年毎に老いが顔に刻まれていく。見分けがつかない顔になるのは当たり前だ。高橋がうなづいてるぞ。

ここ「特別攻撃隊忠魂の碑」の前に立ち、追悼の言葉を述べて二十五年になる。桑野君が家族に宛てた手紙も読ませてもらった。恐らく私は涙顔になっていただろう。信太博蔵君の硫黄島での戦いもここで語った。

数年前から「もう、これが最後かな」との思いで追悼の言葉を述べてきたが、終わりそうにない。石橋、もう飽きただろう。

この四月、五月は我が同期生の命日が多い。高橋忠君が「艦爆彗星」で四月十二日。山本英司君が「零戦」で今日二十九日。桑野正昭君と石橋憲司君が「攻撃機天山」をかって五月十一日、ともに沖繩の空と海で散った。小松文男君だけは終戦一週間前、金華山沖で敵空母に体当たりした。何れも満十八歳であった。沖繩と本土をめぐる特攻作戦で空と海に散った海軍特別攻撃隊員は二千四十五名、陸軍千二十二名、合せて三千六十七柱と記録されている。

戦前を振り返り、私達の子供の頃の世界地図をみると、アジアの独立国とは日本とタイしかなかった。赤く彩られた細長い小さな島々が日本であった。支那大陸は捨てられた大地と呼ばれ、香港だけが世界に門を開いていた。インド、ビルマをはじめ夫々の国境はあったが、みな植民地であった。

吾々は戦争の唯中で育ってきた。小学校に入ったとき満州事変、やがて支那事変、中学生になって間もなく大東亜戦争。五年の卒業を待たず多くの少年達が陸軍、海軍への道を選んだ。

日本が、その存亡をかけた戦った大東亜戦争。その戦争末期に戦局挽回のためとして用いられた体当たり戦法。「特別」との名を冠し、万に一つもの生還を期すことのない攻撃法、世界の戦史に例のない戦術、戦法であった。日本でなければ、日本人でなければ出来得ない戦斗行為であった。

日本は戦いに敗れたが、アジアの植民地はすべて解放され、独立した。前にもここで申し上げたが、戦後特別攻撃隊に様々な論がなされたなかで、海外の歴史家、学者達から驚きと畏敬の念

を込めて

本日このあと、「予備役ブルーリボンの会」主催の「自衛隊幻想」出版記念シ

「花負いて 空うち征かん 雲染めん
かばね悔いなく われら散るなり」
— 詠み人知らず —

昭和十九年末、フィリピンの特攻基地宿舎の壁に書かれた隊員、おそらく二十才を過ぎて間もない若者であろう隊員の辞世の詩をもって追悼の言葉を終わりたい。

祖国と家族を想う一念から、恐怖も生への執着もすべて乗り越えて、崇高な美学を見るのである。」

「特別攻撃隊」である。彼らには権勢欲とか名誉欲など、かけらもなかった。祖国を憂うる貴い熱情があるだけだった。代償を求めない純粋な行為。そこに真実の偉大さがある。

日本は太平洋戦争に敗れはしたが、その代りに何ものにも代えがたいものを得た。それは世界のどの国も真似の出来ない「特別攻撃隊」である。彼らには権勢欲とか名誉欲など、かけらもなかった。祖国を憂うる貴い熱情があるだけだった。代償を求めない純粋な行為。そこに真実の偉大さがある。

をこめた言葉が多くあった。再び読み上げたい。
フランスの作家であり、大臣として来日されたこともあるアンドレ・マルロー氏の言葉である。

をこめた言葉が多くあった。再び読み上げたい。
フランスの作家であり、大臣として来日されたこともあるアンドレ・マルロー氏の言葉である。

平成二十九年四月二十九日
藤本光男

ご参列いただきました皆様、本当に有難うございました。

また、ここ総社神社 川尻宮司様、実行委員長 山本高敬様、毎回、司会進行の役を担われる藤原信悦様、この式典のためラッパを求められ吹奏される佐々木和夫様、ハーモニカの鈴木良次様、下間ヒサ

健夫様に心から感謝申し上げます。

二十六年間、この式典を主催されてこられた榎谷政雄様、そしてお父上 故榎谷

を願ってやみません。その為ご来秋されました荒木和博様、荒谷卓様、伊藤祐靖様、そして葛城奈海様、厚くお礼を申し上げます。

(石井 光政 記)



秋田県総社神社

本 殿

第五十回「若櫻の碑慰霊祭」に参列して

専務理事 衣笠陽雄

平成29年5月21日、三重県津市香良洲町の「若櫻の碑」前に於いて節目となる第50回目の慰霊祭が実施された。顕彰会として正式に参列するのは初めてであったが、慰霊祭について報告する。

1 慰霊祭の状況

この「若櫻の碑」は、三重海軍航空隊の跡地に、三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者を御祭神として昭和44年に建立された。碑の手前には三重空で教育を受けた甲・乙・乙(特)、丙各期の碑がずらりと並び壮観であった。(写真) 本慰霊祭は、創立千四百年で、伊勢神宮同様20年に一度遷座をしているという由緒ある香良洲神社が主催し、後援に公益財団法人隊友会三重県隊友会及び旧若櫻桜頭彰会有志が、又公益財団法人水交会三重県水交会が協力して実施している。

式典は、開祭の辞後、軍艦旗掲揚から開始された。本日のため横須賀から回航して参加した海上自衛隊開発群の試験艦「あすか」のラッパ隊の「君が代」吹奏と共に「あすか」から寄贈されたという海軍旗・自衛艦旗が高々と掲揚された。次いで献花が海上自衛隊開発群司令岡

田海将補及び試験艦あすか艦長中村二等海佐と乗組員が、又急遽の御指名であったが特攻顕彰会代表として筆者が献花した。受領した位置から碑まで30m近くありかなりの時間を要した。次に香良洲神社神官による神事が実施された。内容は、修祓、降神の儀、祭主一拝の儀、献饌、祝詞奏上、玉串奉奠(参列者全員実施)、撤饌、祭主一拝の儀、神職退下と整斉と

実施され神事は無事終了した。次いで各代表の挨拶があった。最初に主催者代表として、香良洲神社氏子総代の今井氏から「・・・この慰霊祭も50年の節目を迎えたが、戦後72年を迎え悲惨な戦争が人々の心から薄れていくことを危惧している。あの多くの方々の犠牲があつて今の日本があり、私たちが生かされているという気持ちを持って今後ともこの慰霊碑を管理し末永く守って生きたいと思っている。」との挨拶があった。次いで後援会代表として三石三重県隊友会会長から「・・・今年50年という節目にあたり、支援を御願いした所、初めて横須賀から自衛艦の派遣、艦長・ラッパ隊・三重県出身隊員の参列を頂き感謝申し上げます。御英霊もお喜びの事と思います。隊友会が旧若櫻顕彰会の意思を引き継ぎ早7年、この間霊苑の整備を実施して来ました。・・・」

続いて小川旧若櫻顕彰会会長から参列

の御礼と、三重航・卒業後の厚木・木更津での貴重な経験・思い出話があつた。次に慰霊電報の披露、青木正隆氏による奉吟、三重海軍航空隊元隊員による三重海軍航空隊歌奉唱、そして閉式の辞を以つて慰霊祭は終了した。

2 三重空、慰霊祭・慰霊碑、資料館等についての所見

● 三重海軍航空隊は、ミッドウェイ作戦以降航空戦力の大増強が叫ばれその一環で、昭和17年(一九四二)8月1日津市香良洲町に開設され、予科練教育が開始された。その後、昭和19年8月に滋賀海軍航空隊が、昭和20年3月には奈良及び高野山分遣隊が三重空から独立していった。昭和20年6月1日飛行予科練習生の教育の変更有り、航空特攻要員教育が開始されたがその成果を見ることなく、終戦とともに解散されその歴史を閉じた。開隊から終戦まで僅か3年間であつたが、約3万8千人が入隊し、最盛期にはこの地で1万5千人以上が航空機搭乗員として基礎訓練を受けた。三重海軍航空隊の敷地は雲出川の三角州地帯であり、飛行場として適地であつたが、教育は飛行基礎教育が主体であつたため敷地内には連絡機、グライダー使用の短滑走路のみで、練習飛行は、鈴鹿第一航空基地及び三重海軍航空隊専用練習飛行場

である鈴鹿第二航空基地で実施された。近傍の明野には陸軍航空のメッカである明野陸軍飛行学校（特攻戦没者148名を含む約1700名の戦没者）がありその華々しい活躍ぶりは教育部隊とは比較できないが、彼らにも横目で見つつも「予科練」という名が彼らに誇りと矜持をしつかり持たせた事は想像に難くない。

● 「若櫻の碑」苑は前述の通りの配置であるが、各期の慰霊碑を確認した所、乙種が#19期、#20期、#21期、#22期、#23期、乙種（特）が#3期、#5期、甲種が#10期、#11期、#13期、#15期、丙種が#15期、その他に「予科練教育に捧げられた隊員の碑」があり、全部で13基あったが、各期毎に慰霊碑を建立する団結力には敬服する。仔細には確認しなかったが、赤字の氏名が刻まれた碑、又甲種#12期の碑が無く尋ねると「若櫻の碑」苑の外の離れた所にあるとの事。赤字は建立時に何故か生存していた同期も記載したとの事、甲種#12期は乙種との折り合いが悪く同じ苑内には入らないと決めた事（らしい）。三石三重県隊友会長は同じ様な慰霊祭を二度やらねばならぬと困っているとコメントされていた。生存者が居なくなったら纏めるのかどうするか分からないが、碑ひとつ建立するに

も色々考えさせられる問題があるのだと改めて感じた。（文末に予科練の区分表を付記したので参考にされたい）

● 現在「若櫻の碑」苑周辺には、三重海軍航空隊の正門、レンガ塀、係船池等の僅かな遺構が残されているだけである。しかし予科練関係者が昭和55年に開館した「若桜会館」（平成10年旧香良洲町に寄贈され現在「津市香良洲歴史資料館」として戦時下の市民生活資料と共に貴重な三重海軍航空隊及び特攻関係資料が行き届いた管理で展示されている。資料館には三万名が記載されている厚さ15cmの名簿があるが、係りの話では、アイウエオ順になっておらず、データベース化もされていないので、時折ご遺族が本当に所属していたのか確認に来られるが、自分で探しても上！掛かるらしい。どんな名簿でも将来の使用の便を考慮して作成する必要があると思つた。



海軍旗・軍艦旗



若櫻の碑

参
考

海軍飛行予科練習生制度 (昭和18年5月22日改正)				
種別	修行年数※	受験資格	採用年齢	
甲種飛行予科練習生	1年6カ月	中学四年一学期終了 (後に中学二年修了)	16歳以上20歳未満 (後に15歳以上20歳未	
乙種飛行予科練習生	2年6カ月	高等小学校卒業	14歳以上18歳未満	
乙種飛行予科練習生 (特)	1年	乙種志願合格者の 中から採用	—	
丙種飛行予科練習生	6ヶ月	一般下士官兵 から採用	—	

※ 修行年数は、各種とも戦況によって異なり、戦争末期には、特別攻撃隊要員選抜等により短縮される事あり。

○ 飛行専修予備学生は、大学・専門学校・高等学校卒業後、採用

○ 飛行専修予備生徒は、海兵団入団後、志願により採用

第47回指宿海軍航空基地「哀惜の碑慰霊追悼式」に参列して

評議員 石井 千春

平成29年5月27日(土) 第47回指宿海軍航空基地「哀惜の碑慰霊追悼式」に参列しましたので、報告いたします。

指宿海軍航空基地は水上偵察機として昭和19年1月1日に開隊した。零式水上偵察機、九四式水上偵察機、零式観測機による対戦哨戒、船団護衛等の任務につき、二式訓練用飛行艇による操縦訓練も行われた。

昭和20年、沖縄戦で南西諸島方面の索敵の要衝となった。この指宿基地から、水上機による特攻隊が出撃する、同年2月、硫黄島に米軍が上陸、戦況は逼迫し、燃料の欠乏は深刻であった。海軍は練習航空隊の飛行訓練を中止し、練習機による特攻隊を編成する。

指宿基地は、北浦空、宅間空、鹿島空、福山空、天草空で編成された水上機特攻隊の沖繩への中継基地となる。4月から7月まで計44機の特攻機が飛び立つ。搭載する爆弾(250キロ、800キロ)のために重量超過となり、片道燃料の出撃だった。月明の夜間飛行である。特攻隊の編成、出撃の詳細は会報106号(平成27年8月号)衣笠陽雄専務理事の

記事を参照されたい。

第47回指宿海軍航空基地「哀惜の碑慰霊追悼式」は例年通り田良浜の旧基地跡に建つ「哀惜の碑」前で午後3時より行われた。旧基地の配置、現在慰霊碑公園となっている一帯の様子は、会報111号(平成28年8月号)羽渕徹也元事務局長の記事に詳しく記されている。

慰霊追悼式は、指宿市在住の旧海軍出身者による「指宿かもめ会」が昭和46年より毎年5月に行っていたが、平成2年、市長を会長とする顕彰会が設立され、社会福祉法人指宿市社会福祉協議会が以来、主催している。

当日は、海風の強い晴天で、ご遺族5名以下、生存者数名、来賓、顕彰会役員、有志の合計75名が参列した。開式のことば、国旗・軍艦旗掲揚、黙祷。指宿基地を飛び立った特攻隊員82名の英霊と殉職者、空襲による戦死者110名の御霊に哀悼の誠を捧げて、顕彰会会長が、あいさつを述べた。続いて「指宿かもめ会」代表、吉田安宏氏(元乙飛23期海軍飛行兵長)が追悼のことばを述べた。献花の後、遺書朗読、式電披露、献詠と続き、国家・軍艦旗降納、一同礼拝し、閉式となった。

昭和20年5月4日、琴平水心特攻隊員として指宿基地を飛び立ち、沖縄南西海域で散華された中尾武徳大尉の遺文を以下に引用したい。昭和18年10月、東京帝国大学法学部の学生であった彼が、徴兵検査を間近にひかえて認めた、友人宛の手紙の一部である。

「・・・死は生と別のものではなく、生の意義を探ねることによってのみ知り得るものである。この世に生を享けているもの、現実の世界にあるものの考えられる死は、生の終点ではなくして、生の一点に外ならない。よく生きることがよく死ぬことである。したがって、よく死ぬことによつてよく生きうるといふことも出来よう。

われわれは如何にすればよく生きることが出来るかを探求し、生を意義あらしめているこの世の理法に参することによつて生死を解決することが出来る。日常生活において移り行く時々刻々に生があり死があるのである」。(岩波文庫『新版きけわだつみこえ』より)

平成29年度義烈空挺隊慰霊祭に参列して
専務理事 衣笠 陽雄

平成29年6月10日11時から、沖縄県糸満市摩文仁の丘の義烈空挺隊慰霊塔前において全日本空挺同志会沖縄県支部主催により「平成29年度義烈空挺隊慰霊祭」が実施された。顕彰会を代表し臼田理事と共に参列をしたので慰霊祭の状況について報告する。

1 慰霊祭の状況

この義烈碑は、昭和20年5月24日に読谷飛行場に強行着陸し、米軍の飛行場を一時使用不能にし、その間特攻攻撃を集中して戦勢を一挙に挽回しようとした日本軍最後の乾坤一擲の攻勢作戦の中で、その成否を賭けた「義号作戦」を強行し玉砕した義烈空挺隊員88柱と第三独立飛行隊員25柱の計113柱(碑の戦死者銘板)を御祭神として、昭和51年5月24日に全日本空挺同志会によつて建立されたものである。それ以来絶えることなく慰霊祭は継続している。碑名の「義烈」は、奥山隊長の遺書の筆跡を拡大して刻んであり、主碑の石は、発進した健軍飛行場傍の金峰山から採石されたものである。慰霊碑の設置場所については当初、実際

に突入した読谷飛行場の現場（ほぼ特定されてる）が考えられたが、将来の維持管理や参拝の容易性、交通の便等々から現在の摩文仁に決定された。しかし例年慰霊祭では、当日の朝、義烈空挺隊が強行着陸した読谷村の旧北飛行場跡地に設置されている「義烈空挺隊玉砕の地」木碑に対する献花式を実施してから摩文仁に移動して義烈碑前で慰霊祭を実施するのを例としている。今回も多くの方が献花式に参加されたが、摩文仁の義烈碑と違って一本の木柱のみで極めて質素である。

しかしこの現場は実際に戦闘が行われ玉砕したという極めて霊の強い場所であり参列者は玉砕義烈空挺隊員への強烈な慰霊顕彰の気持ちを持たれて参拝されたと思われる。

今年の慰霊祭は主催の全日本空挺同志会沖縄支部員を主体として、宮城沖縄県遺族会会長、旧挺進団関係者を始めとして、直海会長以下全国の空挺同志会会員、児玉空挺団長以下の現職空挺隊員、藤田沖縄県隊友会・偕行会会長、山縣沖縄県防衛協会事務局長等総勢50名程が参列した。

祭りは、琉球八社の一つである沖宮（おきぐう）の北西神官を祭司として以下の順序で整齊と実施された。①開式の辞、②国歌斉唱、③黙祷、④修祓の儀、⑤御霊鎮めの儀、⑥献饌の儀、⑦祭司祝詞奏上、⑧祭主

祭文奏上、⑨追悼の辞、⑩献楽、⑪玉串奉奠、⑫撤饌の儀、⑬御霊送りの儀、⑭閉式の辞。⑧祭主祭文奏上では、桃原空挺同志会沖縄支部長が、「・・・米軍の戦闘詳報によれば飛行場は大混乱になり戦闘機26機大破、燃料集積所二箇所炎上、七万ガロンの燃料喪失、二十数名の負傷者を出し完全に機能不全に陥ったとある。猛訓練を重ねた精鋭達が阿修羅の如く米軍に襲い掛るの目に浮かぶ。パレンバンから沖縄まで空挺隊員は常に過酷な状況下困難な任務を遂行してきた。戦後、部隊は消滅したがその精神は、精鋭無比の第一空挺団に引き継がれ、挺身赴難の精神は空挺隊員一人一人に受け継がれている。戦後七〇年を経てご遺族、当時を知るものは少なくなっているが、我々空挺同志会沖縄支部員は、空挺戦史を勉強し将来に語り継いでいかねばならないと思っている。現在世界は不透明、混乱の時を迎え何が起こつても不思議でない時期にある。我々は日本国民として如何なる状況にも対応できるよう備え、義烈空挺隊員の末裔としてこの碑を守り挺身赴難の精神を内外に知らしめる事をお誓いする・・・」

と力強く述べた。続いて同志会長、空挺団長の追悼の辞の後、現在99歳で御健在の全日本空挺同志会顧問の田中賢一氏からの追悼の辞の紹介があった。概要は「・・・夫れ大和民族は、時に隆退あるきも神代より永遠なり。然るに昭和の御代に至りて世界の列強相手に戦い敗れたり。特攻たる戦法を今の自衛隊に求める気は毛頭なきも、国を愛する精神は堅持せざるべからず。沖縄居住の同志が特攻戦士の慰霊行事を行うと聞き感謝の念禁じあたわず。此処に一筆啓上す」と超御高齢になられても落下傘部隊の慰霊顕彰の心を持ち続けられておられることに一同感銘を覚えた。⑩献楽では、当初全員で「空の神兵」を合唱の後、「義烈空挺隊讃歌」の紹介と第15旅団音楽隊により披露された。紹介によればこの歌は、講談社の特派員として出撃直前の義烈空挺隊員を取材し、泣きながら見送ったという歌人宮本旅人氏が作詞され、昭和50年頃渡辺岳夫氏が作曲し作成された様である。余り聞きなれない歌であるが内容に相応しい良い曲である。⑭閉式の辞の後、五メートル程離れた摩文仁で最も高い絶壁の淵に建つ義烈空挺隊を輸送し同じく戦死された独立第三飛行隊員の慰霊碑でもある「空華之塔」に翼友会の生残り戦友の方とお参りをして義烈慰霊祭関連の行動を終了した。今年度の慰霊祭は、濱田事務局長の周到な準備により、初めての参列者でも分かりやすい説明がなされ有意義な慰霊祭参加となった。



「平成 29 年度義烈空挺隊慰霊祭」(平成 29 年 6 月 10 日 / 沖縄県糸満市摩文仁平和記念公園義烈碑前)

遺族として義烈慰霊祭に参列して

白田 智子

沖縄は梅雨入りしていた。でもその日は快晴であった。私にとって沖縄は特別な場所である。父が72年前の4月1日、知覧より沖縄の海上の戦艦に特攻攻撃し、散華して眠っている海である。今日も海の色は美しく、風が心地よく私の身体を通り過ぎていく。読谷飛行場跡に那覇市から朝7時過ぎに車で向かった。私は沖繩に10数年前に来た時、義烈空挺隊の木製の柱が立っていたことを思い出した。

その場所に柱がなく、学校の校庭になっていた。今は読谷村掩体壕の横の前に見た支柱と同じように建っていた。その場所、9時過ぎに献花式が行われた。主催者、来賓衣笠専務理事、私も献花をさせていただきました。献花式が終わって、すぐに移動し、全員糸満市摩文仁の平和記念公園に移動し、義烈空挺隊の碑の前に参列した。昭和51年に「義烈の碑」を建立している。「義烈」の文字は奥山隊長の書き残した筆跡を拡大した文字と聞いている。その前で、沖宮の神官様が慰霊祭を神式で行い、沖縄支部自衛隊、自衛隊の音楽隊、関係者が集い、式典の司会は事務局長濱田様が進行し全日本空挺

同志会沖縄支部の主催で執り行われた。今年には特別な式典のようです。義烈空挺隊の唄がお披露目されたことです。自衛隊の音楽隊に所属している女性の方が歌う歌声が、摩文仁の丘に建ち並ぶ慰霊碑に響き渡り、各県の碑のご英霊も歌声にお喜びに満ちたことでしょう。義烈空挺隊の英霊の皆様のこと、忘れません。そして全日本空挺同志会沖縄支部のお計らいで盛大かつ厳粛な式典を行いました席に参列できましたこと、私は嬉しく思っています。義烈空挺隊慰霊祭が今後とも長く続きますようお祈り致します。



殉国沖繩學徒顕彰祭72年祭に参列して

評議員 及川 昌彦

平成29年6月23日(金)、殉国沖繩學徒顕彰学生実行委員会「主催による殉国沖繩學徒顕彰72年祭が靖國神社で実施されました。沖繩戦終結の日である6月23日に昭和32年より毎年、靖國神社で斎行されてまいりました。沖繩最初の慰霊塔やひめゆりの塔、更に沖繩師範健児の塔などを建立された金城和彦先生のご長男にあたる金城和彦先生(元国士館大学教授)が父君の慰霊顕彰の御志を継がれ現在は首都圏学生文化会議の学生有志で斎行されています。

事前に参集殿2階で殉国沖繩學徒をお偲びする集いが行われ、学生が意見発表と関係者の挨拶がありました。

その後拝殿に移動、祭典が執り行われました。当時16歳の遺文や遺詠を学生が奉誦、最後に合唱団が沖繩県立中学と高等女学校の校歌を献楽して祭典は終了。遊就館前で記念撮影をして解散しました。

特攻隊員の大半が独身で直系の遺族がないのと同様に16歳以下が中心だった沖繩學徒にも直系遺族が存在しない中で学生有志がこういったお祭りを斎行していくことを心強く思いました。



遊就館前における記念撮影



拝殿における遺文・遺詠奉誦

第19回十三塚原特別攻撃隊慰霊祭に参列して

編集長 金子 敬志

平成29年8月15日(火)に催行された第19回十三塚原特別攻撃隊慰霊祭に顕彰会を代表して参列したので報告する。

一 慰霊祭の状況

1 日時

平成29年8月15日(火) 11時～12時

2 場所

十三塚原特別攻撃隊感謝慰霊の碑前
(鹿児島空港前チエコ村内)

3 式次第

国歌斉唱

神事

拝礼

修祓の儀

降神並びに献饌の儀

祝詞奏上

玉串拝礼

撤饌並びに昇神の儀

鎮魂の鐘及び黙禱

献歌

戦友(とも)よ安らかに

遺書奉誦

第3八幡護国隊 島 澄夫少尉

慶応大学 第14期予備学生



祭壇

昭和20年4月16日第一国分基地出撃
 沖縄西方沖で散華
 奉納演武
 薩摩の秘剣 野太刀示現流
 献花
 主催者挨拶
 霧島高原ビール株式会社
 代表取締役会長 山元 正博氏
 来賓挨拶
 霧島市長 前田 終止氏
 遺族代表挨拶
 中島 富士子氏
 永尾 博中尉(注1)の妹



祭主拝礼

二 所見

当日の朝は激しい雷雨であり開催されるのか心配であったが、会場に向かう途中に小降りになってきた。会場には不案内だったので、事前のお知らせにあった鹿児島空港からの迎え便を御願いし、開始30分ほど前に会場についた頃には雨は止んでおり、曇り空ではあるが無事開始された。

神事の祭主は、加治木島津家13代当主で精矛神社(くわしほこじんじや)(注2)の宮司である島津義秀氏が務められ、式次第に従い済々と執り行われた。



奉納演武

神事の後、慰霊碑脇に設けられた鎮魂の鐘の打鐘に合わせて参列者は1分間の黙とうを捧げた。
 これに続いて献歌が行われた。歌手は、ジャズシンガーの田中シヨウリ氏と紹介された。筆者はジャズシンガーと紹介されたので若い方かと思ったが、お姿を見ると私よりはお年が上かなと感じた。しかし声に張りがあり情感のこもった熱唱に驚いた。後でお年を訪ねると83才との事で、2度驚いた次第である。
 奉納演武にはチェコ人のヤン氏、スロバキヤ人のパトリック氏も参加された。両氏は日本文化に造詣が深く、会社を訪れていた所、慰霊祭を知り、ぜひ参加したいと希望されたとの事である。

参列者は昨年より少なかったが、地元の方の参列が多く、小学生と思われる児童を同行された方を数組見ることが出来た。

昨年参列した及川評議員の報告(第114号に掲載)にもあるように、今後とも本慰霊祭は継続されるものと感じた。



参列者による献花

注1

「永尾 博中尉」

13期予備学生、昭和20年4月28日 第3草薙隊として99式艦上爆撃機で第二国分基地を出撃、沖縄西方で散華



永尾博中尉妹 中島富士子氏

注2

「加治木島津家」

薩摩藩初代藩主 島津忠恒(家久)の次男 島津忠朗を初代藩主とする薩摩藩「御一門」の一家、「御一門」は藩主家が断絶した時に後継者を出す役割をもっており、島津家分家のなかでは別格の扱いを受けていた。

「精矛神社」

鹿児島県始良市加治木町日本山に鎮座する神社 御祭神は島津氏第17代当主島津義弘公(薩摩藩初代藩主島津忠恒の父)

注3

碑文には、第二国分基地とあるので、本稿では第二国分基地とした

もう一つの特攻基地
国分(第一・第二) 基地跡研修

評議員 倉形桃代

5月3日、知覧特攻基地戦没者慰霊祭が催行され、当顕彰会の代表・原島淳子評議員に同行、参列した。知覧特攻平和会館の来館者数は、年間70万人を越える。今年の特攻祭参列者は約90人と報道された。遺書やご遺品等が展示された平和会館にも多くの見学者が訪れていた。数多くある特攻隊の出撃地の中で、知覧はその名前をよく知られているが、今回の鹿児島行きを機に、私達は鹿児島空港近くにある海軍航空隊の基地であった国分第二基地(現・鹿児島空港が所在する鹿児島霧島市溝辺町・一帯は十三塚原と呼ばれている)及び国分第一基地(現・陸上自衛隊国分駐屯地が所在する。霧島市国分福島)を訪ねた。

霧島市ホームページの慰霊祭についての記載では、国分第一・第二基地から出撃された特攻戦没者は427柱とされている。

○国分第二基地

慰霊祭の前日5月2日の朝、私達は鹿児島空港へ向かった。ゴールデン・ウィークに入ったこともあり、空港は沢山の旅行者で混雑していた。この日の深夜、桜

島が大きな噴火をした為、鹿児島市内に入ると硫黄の臭いがして細かい火山灰も降っていた。

空港までお迎えを頂き、最初に訪ねたのはチェコ村「バレル・バレイ・プラハ&GEN」（鹿児島県霧島市溝辺町）という施設の敷地内に建立された「十三塚原特別攻撃隊慰霊感謝の碑」であった。この碑はチェコ村を経営されている山元正博氏が私費で建立され、平成14年から毎年8月15日に慰霊祭も行われている。そのことを知り、空港の近くという事もあり、是非とも参拝させて頂き、英霊の為に真心を尽くされている山元氏にお目にかかり感謝と敬意をお伝えしたかった。山元氏は多才な方で、(株)源 麹研究所代表取締役・農学博士、そして霧島高原ビール(株)の会長、スロバキア共和国の名誉領事もされている。

山元氏がチェコ村を造られた一带は、国分第二基地があったエリア内にあり、一部崩落しているが、今も当時の地下壕が残っている。光栄なことに「慰霊感謝の碑」には、山元氏自らご案内を頂き、お話を伺いながらお参りする事ができた。異国を思わせる美しい庭を抜け、山の斜面を少し下りた場所に、その碑はあった。可憐な花々と緑に囲まれた碑には、敬礼した特攻隊員の

レリーフと「ありがとうの花びらを朝な夕なに」と刻まれたプレート、碑前には花束が手向けられていた。傍らの副碑には建立の趣旨が刻まれている。



十三塚原特別攻撃隊慰霊感謝の碑

「ご縁をいただき、弊社内に英霊の方々への感謝の碑を建立することにした。日本国の繁栄、鹿児島空港の繁栄、当社の繁栄もこの基地と英霊を抜きにしては考えられない。更に第二の国難といわれる現在の日本経済の危機的状況、道徳の乱れを考え、日本国を守るために華と散った英霊の方々へ

の感謝の気持ちを明らかにして原点に立ち返り、誰が作った平和か、誰が礎となった繁栄かを再度検証するために、この碑を建立する」（筆者要約）

文面から、山元氏の英霊に対する深い敬愛のお気持ち伝わってくる。実際、慰霊碑を建立するに至った経緯の中には、従業員の方々からの「英霊の存在を感じた体験」もあったそうだ。私達は、碑に持参した御神酒をお供えた。山元氏が祝詞をあげて下さる中、この地に今も留まられているかもしれない英霊の平安を祈った。



山元氏と原島評議員

その後、山元氏のご案内で、もう一つの慰霊碑「十三塚原海軍特攻の碑」が建つ上床公園にも連れて行って頂いた。碑は昭和54年4月6日、桜島や鹿児島空港を見下ろす高台に建立された。凛々しい眼差しで彼方を見つめる飛行兵の像は、地元溝辺町出身の山下忠男海軍一等飛行兵曹（昭和19年11月17日南西諸島方面での戦闘により戦死・19歳）の写真をモデルにしている。



十三塚原海軍特攻の碑

周囲には、この地から出撃した日付・部隊名と英霊のお名前を刻んだ碑をはじめ、

当時の滑走路のコンクリート片や、海底から引き揚げられた折れ曲がった零戦のプロペラ・追悼歌碑・航空自衛隊の練習機T-34が展示されている。すぐ傍にあるコミュニティセンター内には「国分第二基地特攻資料展示室」もあり、ご遺影やゆかりの資料を見ることが出来る。



出撃戦没者名碑

その窓口で購入した書籍「鎮魂 白雲にのりて 君還りませ 特攻基地第二国分の記」（十三塚原特攻碑保存委員会編）には、当時の状況や周囲の戦跡の紹介、英霊の手記や遺書・ご遺族の証言等が収められている。資料的価値の高さもある

が、何より編纂された方々や関係者の「後世に語り継ぎたい」という情熱と亡き息子や兄弟を想うご遺族の悲しみがひしひしと伝わって来て、私は心打たれ何度も読み返した。この書籍のタイトルは、慰霊碑脇の碑に刻まれた美しくも哀しい鎮魂の詩文からとられている。

（碑文）
鎮魂

白雲にのりて

君還りませ

さくらの そよ風

菊の かおり

あなたの守り給える

ふるさとは いま

平和に

満ちています

昭和三十四年四月六日

○国分第一基地

知覧での慰霊祭の翌日、5月4日には、国分第一基地があった陸上自衛隊国分駐屯地にある資料展示室を見学した。正門前には「特攻機発進之地」の碑がある。上床公園で行われる慰霊祭と同じ日の午前中、この碑前でも慰霊祭が行われる。霧島市の主催で、毎年国分から最も多くの特攻隊が出撃した4月22日に一番近い

日曜日に行われる。今年の慰霊祭は 4 月 22 日に斎行され、山元氏も参列されたと仰っていた。



「特攻機発進の地」碑

残念な事に、見学を希望した基地の「薩摩隼人記念館」は建て替え工場で、館内を見ることはできなかったが、駐屯地第12普通科連隊広報班長・野里康男2等陸尉のご案内で、一部の資料を公開している臨時展示室を見学させて頂いた。主な展示は、郷土部隊である陸軍歩兵第45連隊関係の資料だが“旧国分特攻基地

概要図”をはじめ、国分第一基地から出撃された特攻隊員の遺影等の展示もあった。時間の関係で行くことはできなかったが、駐屯地の周辺には司令部壕や発電所跡等の戦跡が多く残っているようだ。野里班長が庁舎の屋上で、当時の飛行場一帯の様子の説明をしてくださった。滑走路の方向や第二基地との位置関係等、具体的にイメージすることができた。

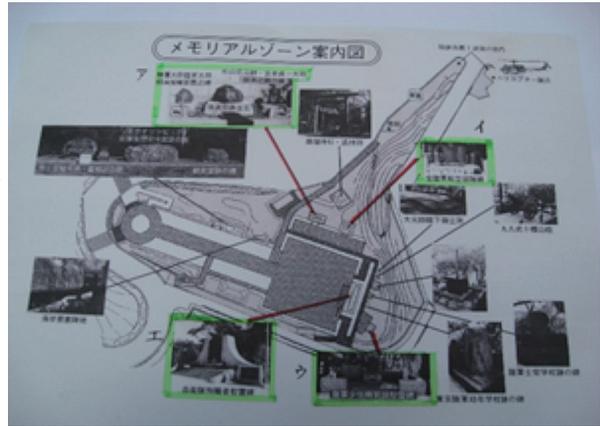
敗戦から72年がたち、多くの当事者が鬼籍に入られ、直接お話を聴ける機会は少なくなつた。これからは、残された資料や映像・英霊が残された手記や遺書等から当時を知る時代へとなっていく。今回、基地跡を訪れ現場に立ち、地元の方々が大切に守って下さっている英霊が生き残った証、そして厚い追悼のお気持ちに触れる機会をいただいた。少なからず、当事者の方々と接する機会を頂き、実際に話を聴く事ができた私達の世代は、更に学び、先人から託されたものを未来へ正しく伝える“次の語り部”としての任務を担っているのだと、改めて強く感じた。研究であった。

平成29年度市ヶ谷台慰霊祭に参列して
理事 水町 博勝

平成29年9月20日(水)市ヶ谷駐屯地(メモリアルゾーン)において市ヶ谷台慰霊祭が行われ、理事長代理で参加しました。

市ヶ谷台慰霊祭は、陸軍中央省・部に務めた有志により昭和48年「市ヶ谷台慰霊会」が結成され、敗戦の責任を取って自決された陸軍大臣阿南大将茶毘の碑、第一陸軍総軍司令官杉山元帥・同司令部付吉本大将自決の碑、大本営作戦参謀晴氣少佐の碑、そして陸軍航空部隊戦没者慰霊碑、更に自衛隊創設以来訓練・災害派遣等出動中に殉職した自衛隊殉職者慰霊碑への慰霊参拝を行ってきました。六本木の防衛庁市ヶ谷移転に伴い駐屯地内に点在していた記念碑を一か所に、平成13年から15年にかけて現在のように整備されました。

平成16年瀬島龍三氏が市ヶ谷会会長に(特攻隊戦没者慰霊顕彰会では平成4年から会長)、平成18年から山本卓眞偕行社会長(特攻隊戦没者慰霊顕彰会会長は平成16年から)に於いて実施。平成19年からは偕行社が主要行事として毎年九月



市ヶ谷基地メモリアルゾーン

一 慰霊祭の状況

市ヶ谷基地を古くから知る者は基地入門について、以前と違って省になってから一段と厳しくなつたと聞く、それは当然で情報が集中し、中枢の部署のある基地、今北朝鮮のミサイル迎撃対処のPAC3も展開、入門のチェックを厳しくすることは当然です。

基地内にある慰霊碑参拝のネックは何処も基地の立ち入りに在ります。通常であれば入門証を提示、又は正門での入門手続きを行い慰霊碑の場に行くとこ

本慰霊祭参加のチェックポイントはグランドヒル市ヶ谷一階ホールに置き、慰霊祭・直会の受付を終えると、バスに乗車そのまま会場に直行した。慰霊祭にあたり正門前での混乱を避け、最良の方法がとられていました。

参加者は国会議員、友好団体代表、防衛省の内局・陸自・空自の来賓のほか、阿南家・吉本家のご遺族、慰霊会会員、各地偕行会会長、陸士等各期代表、偕行社理事・監事・評議員、会員など、合計160名の参加でした。

15時10分 全員は自衛隊殉職者慰霊碑前で記念撮影、

15時20分 祭式開始

開式の辞 黙祷
国歌斉唱 黙祷
偕行社富澤暉理事長による祭文奏上
祭電披露
偕行合唱団による奉唱、
全員の「海行かば」奉唱

焼香（阿南大将茶毘之碑・杉山元帥吉本大将自決之跡の碑前→全陸軍航空部隊碑前→陸軍少佐晴気誠慰霊碑前） 献花（自衛隊殉職者慰霊碑前）
流れ解散・移動バス

直会 偕行社17時〜18時30分

二 所見
大東亜戦争開戦により、昭和16年代市ヶ

谷台にあった陸軍予科士官学校は埼玉県朝霞に移転、替わって大本営陸軍部、陸軍省、参謀本部、教育総監部、機甲本部等次々と台上に移転した。翌17年には陸軍航空本部、航空総監部も移転し、戦中市ヶ谷台は陸軍作戦・軍務の中枢であった。

昭和20年終戦後日本陸軍は解体し、第一復員省を設置、極東国際裁判所の一号館大講堂など、今は一部が市ヶ谷記念館として復元展示されている。

碑を辿って、特攻隊に関わる史実を中心に述べたい。

ア 陸軍大臣陸軍大将阿南惟幾茶毘之碑
サイパン陥落以降陸海軍中央では特攻



攻撃の準備が進められた。陸軍の特攻部隊の編成はどのように進められたか、二つの案が検討された。

甲案 特攻作戦を責任を持って計画的に実施するため、



隊長の責任を明確に、団結と訓練を充実できるような正規の軍隊編成とする。

乙案 特攻要員と機材を第一線兵団に増加配分し、第一線の指揮官が臨機に定めた部隊編成とする。主旨は（我が国の航空不振を第一線将兵の生命によって補う戦法を、天皇の名において命令することは適当でない）とした。海軍特攻創始の大西中将が「指揮官として生還絶無の攻撃を命ずることは統率の外道である」と言われた方策である。

航空総監であった阿南大將は乙案を堅持昭和19年3月28日陸軍参謀本部は特攻作戦は乙案を採用した。

イ 全陸軍航空部隊碑

昭和28年 航空自衛隊誕生の胎動により徳川好敏元陸軍中将を会長に陸軍航空関係者は「航空同人会」を結成し、翌年航空自衛隊は創設された。

同人会は昭和52年英霊の偉業を顕彰し偉勲に報いるため、市ヶ谷兜松広場に全陸軍航空部隊碑を建立、民間の慰霊を目的とした「陸軍航空碑奉賛会」名誉会長に菅原道大元陸軍中将が就き第一回の「碑前祭」を行った。碑名は菅原会長の書、副碑の鎮魂には2,104の全航空部隊名が刻まれている。

陸軍特攻隊戦没者のご遺族・戦友・関係者は3月末靖国神社の陸海合同慰霊祭、4月の市ヶ谷台の碑前祭、秋分の日世田谷山観音寺の年次法要全てに参列されていた。

平成6年二つの会は「航空碑奉賛同人会」に改め、平成9年メモリアルゾーンに「碑」を竣工した。その後会は高齢化に伴い「碑前祭」を航空自衛隊OB会の「つばさ会」に委ねられ、平成17年杉山蕃つばさ会会長（現当会の会長）に継承した。7年経過後会員は数人になり、市ヶ谷台慰霊祭に継いだ（この間小生は碑前祭担当理事を務めた）。自衛隊の支援を得て盛大な碑前祭を行ってきたが、この祭典が未永く続くことを希い、我々がいなくともこの碑は厳然と残り後世に何かを語りかけてくれるであろうと会誌に書き残している。このことはメモリアルゾーンの各碑の想いも同一である。



陸軍少佐晴氣誠慰霊碑

晴氣少佐は昭和16年大本営参謀、参謀本部作戰班在任時、サイパン島防衛計画の主務者、水際迎撃作戰を採用したが戦果なく、19年7月7日サイパン玉砕、絶対防衛圏の一角が崩壊し、7月22日東條内閣は退陣、その後比島・レイテ島決戦に勝利して、終戦を導入しようとする中央の方針のもと、捷一号作戦が10月18日開始された。

この決戦に海軍、次いで陸軍が特攻隊を編成し作戰に加わった。レイテ作戰の失敗を山下司令官は「機動艦隊を失って航空戦力の重要性、陸海軍航空の統一運用」反省として中央に伝えている。そして沖繩戦へと続いた。

晴氣少佐はサイパン陥落が後の作戰に及ぼした影響に責任を感じ、終戦後8月17日早朝市ヶ谷台大正天皇御野立所を割

腹自決した。

戦理では敵の弱点に取るべき戦法であったが圧倒的な戦力差に成すすべが無く、4万1000余りの日本軍守備隊は玉砕した。

第一次大戦後大正9年サイパンはドイツから日本の委任統治領となり、島民の9割に当たる3万人の日本人が移り住み、5000人の島民は艦砲射撃等で葬られ、他5000人がクリフから身を投げ命を絶った。

終戦60周年の節目に天皇皇后両陛下はサイパへ慰霊の行幸啓をされている。

「サイパンに 戦ひし人その様を 浜辺に伏して 我らに語りき」「あまたなる命の失せし崖の下 海深くして 青く澄みたり」

サイパンで亡くなった方々への深い哀悼の意を御製に込められた。

エ 自衛隊殉職者慰霊碑

自衛隊創設以来65年、国防の任務を背負い、厳しい訓練・災害派遣の出勤中に尊い命を捧げられた全殉職者1,800余柱の諸霊の碑前で献花した。

この碑前では何時も50年前F-86F戦闘機で三沢沖に墜落した同期生、殉職した唯一人を想い浮かべ、頭を垂れた。



自衛隊創設記念日の観閲式・観艦式の前には防衛省として殉職隊員の慰霊式典が毎年行われている。

尚市ヶ谷台見学ツアーが防衛省広報で企画されていて、月々金（休日を除く）の午前中市ヶ谷記念館・メモリアルゾーンの慰霊碑などを巡る。申込方法の細部は防衛省広報のホームページで確認できる。「完」

千玄室氏講演会及び献茶式について

編集長 金子 敬志

平成29年8月18日（金）から8月19日の間、元特攻隊員千玄室氏が鹿児島県鹿屋市で行われた講演会及び献茶式に参列させて頂きました。

一 講演会

講演会は「かのや未来創造プログラム―平和の花束2017―」の一貫として行われたもので 概要は次の通りです。
日時 平成29年8月18日（金）
会場 リナシテイかのや 3階ホール
次第
オープニング

○ 鹿屋女子高等学校音楽部合唱

「朱の小箱」「星」

○ 主催者挨拶

第1部 平和へのメッセージ

○ 授賞式

最優秀賞・優秀賞

○ 最優秀賞受賞者朗読

・ 小学校5・6年生の部

鹿屋市立鹿屋小学校6年

松坂 琴 さん

「平和について考えるきっかけに」

・ 中学校の部

鹿屋市立上小原中学校3年

郷原 莉理 さん



最優秀受賞者朗読

- 「過去から考える平和とは」
高校の部
鹿屋女子高等学校 3年
井神 香南 さん
- 「平和とは」
講評
審査委員長
上谷 順三郎 先生
(鹿児島大学教育部教授)
- 特別賞授与
「日本国際連合協会会長賞」
鹿屋市立鹿屋小学校 6年
松坂 琴 さん

第2部 平和を考える

- 講演
演題 「平和への思い」
講師 鵬雲斎 千 玄室 氏
(裏千家利休居士15代 前家元)



講話に先立ち千玄室氏の旧海軍時代の写真が映写されました。そのうちの2点を紹介します。1枚は、徳島基地で戦友に野点を振舞われる写真、もう1枚は戦友との集合写真で、右端が西村晃氏、隣が千玄室氏です。



右から西村晃氏、千玄室氏



徳島基地にて野点のひと時

千玄室氏講話

○ 戦後の平和ボケ

北朝鮮の侵略により始まった朝鮮戦争、そしてベトナム戦争、その他、大小の紛争が絶えない。そういう中に在って、戦後72年間、日本はアメリカに守られ来た事を、それで良いという、言わば「平和ボケ」ではないかと心配されました。

○ 戦友について

「鹿屋や串良から、日本のため、愛する家族のため、俺たちの命を捧げるといふ、そういう前向きな気持ちの若者達が出撃して行った」と戦友への思いを述べられました。

そして 412名の仲間、又予科練、その他の隊の戦没者の遺影が海上自衛隊鹿屋航空基地史料館に掲げられ慰霊されている事を紹介し、史料館を訪れてほしいと願われました。

○ 日本の文化

渡来人と土着の人が交友して今の日本の民族が生まれてきた。主張はするが、その主張を受け入れて行こう、一つの物を分け合って仲良く行こうという所から情、情けの文化が生まれてきた。しかしそういう民族意識が戦後バラバラにされてしまった。家族制度が分解され、親を中心とした家庭がバラバラになってしまった。親の存在が薄くなり諍いが生まれて

くる。身近な所から考えていかなければならない。自分たちの主張だけでなく、お互いに助け合って行こうというのが日本の情の文化だと、現状について心配されました。

○ 飛行予備学生選抜

昭和18年、文系学生の徴兵猶予が解除されました。千氏は海軍に入ることになり、舞鶴海兵団に入団、そこで約1か月の間、各種の訓練や色々な試験や検査を受け、同期生約1700名と共に「第14期飛行専修予備学生」に選抜されました。

昭和19年2月1日、土浦海軍航空隊において任官（筆者注）他の海兵団からの選抜者を合わせ、14期飛行専修予備学生は総数約3300名）当時21歳。土浦では2か月半、基礎教育を受けられました。この時に19日の献茶式で使用するお茶碗の持ち主、森丘哲四郎少尉に会われたそうです。

○ 機種区分

基礎教育終了後、戦闘機、陸上攻撃機、艦上攻撃機、水上機など、それぞれの機種が決定されます。

「入隊前に水上機の訓練所で単独飛行出来るようになっていました。フロートを持つ水上機で、琵琶湖のような静かな所でも、波が立つと非常に難しい。バー

ン、バーンと衝撃を受け、フロートが破れると一発（で事故）です。」と語られました。筆者も、同期の海上自衛隊の飛行艇操縦士から水上機の難しさを聞いていましたので良く判りました。

千氏は当然水上機部隊と想っていました。だが、発表は徳島航空隊でした。「えー！そんなもん陸上やないか」と驚き、分隊長の佐藤大尉（飛行予備学生4期先輩）の元に行き「佐藤分隊長、私は水上機の単独飛行まで出来た男です。当然、水上機に進むものと思っていました。なぜ私が陸上機に行かなければならないのですか」と抗議されたそうです。現在の物静かなお姿からは想像できない、若き日の血気盛んな面を知る事が出来ました。

佐藤大尉から「命令だから行ってくれ」と言われましたが「命令だから行ってくれと言われたら、私は納得出来ません。何か欠陥でもあるのですか」と食い下がられた所、とうとう佐藤大尉から形相判断（いわゆる人相見）で死相が出ていると判断された。このまま水上機に進むと事故で亡くなる。貴重な人材を無駄にしないためとの説明を受けられました。

そこまで言われたら仕方ないと退室されましたが、外で待っていた西村晃氏にその話をした所「俺も徳島だ。一緒に行こう」と言われたので泣く泣く徳島に行

く事になったそうです。

○ 白菊

昭和19年5月1日約200名の同期生の方と共に徳島航空隊に着任されました。その時に与えられた飛行機が「白菊」という名前で「こんな女みたいだな名前、強そうやないな」と思ったそうです。しかし、実際に使ってみると、操縦、偵察、射撃、爆撃と色々な事が出来るすごい飛行機だと判ったそうです。そして偵察の中の航法について、身振り手振りを交え「風がこう吹くと飛行機はこちらに流されてしまいます。そうするとここに行くつもりがこちらに着いてしまいます。地上で計算しますが、上空は地上での計算と違ってくるので、機上で修正しなければなりません。機内に20cm位の穴が開いていて、そこに90式爆撃照準器を取り付けて、海上ではそれで波頭を見て修正します」と述べられました。筆者は、海上自衛隊の搭乗員として勤務している頃に同様な事をしていましたので、旧海軍でも同じだったのだなと思いました。

○ お茶のお点前と操縦

「操縦や機内で作業をしていて、あつ、これはお茶のお点前と一緒に気づきました。お茶を点てるには、袱紗を畳んで、棗(なつめ)を清めて、茶杓を拭いてと手順を踏みます、その手順に飛行機

の動きを入れました。其のうち、みんなから『おい千、なぜそんなに早く操縦できるようになったのだ』と聞かれるようになりましただけで『これはお茶のお点前(と同じ)や』と答えました。ご覧頂いた写真にありますように、私は陣中茶箱と言う箱の中に一式の道具を携帯していましたが、飛行作業が終わると仲間が『おーい千、お茶にしてくれや』と私の前に集まります。私の点てたお茶を『あーうまいな。お袋を思い出すわ』皆一碗のお茶を飲んで『ホッとしたわ』とくつろいでいました。お茶の作法が操縦に通じるといふ事で、特に戦闘機の連中は熱心で、森丘君などは朝鮮の元山に行っても私の門弟の元で稽古していました」とお点前を操縦に取り入れた事、それが仲間

○ 特攻志願

徳島航空基地に居られた昭和20年4月12日「搭乗員整列」がかり、集合すると紙を渡されました。そして川元司令から「近々特別攻撃隊を編成するようになる。手元の紙に正直に書いてもらいたい」と言われました。紙には「否、諾、熱諾」とあり、いづれかに○を記し、官・姓名を書いて出すように申し渡されました。一緒に居た西村氏は、当時は結婚して子供も居られたためか「わし、嫌やなー死

ぬの嫌やなー」と言われたそうです。千氏は「自分の思うように書けば良いのじゃないか」と答え、ご本人は「熱諾」に○を書いて提出されました。

その1週間後、再度「搭乗員整列」があり、川元司令より「当隊は只今より総員特別攻撃隊員として特別訓練を行う」と言い渡されました。出撃は夜の12時の予定でしたので夜間の訓練が必要でしたが、実際に夜間に訓練するのは危険だったので、昼間に訓練しましたが、夜間の状態にするため、窓をカバーで覆って(見張り席以外は)外が見えないようにして訓練しました。次の日には突入の訓練を重ねました。

毎日訓練をしていましたが、5月21日「総員集合」そして徳島から30機、高知から30機計60機の白菊が串良に向かうよう命令されました。5月22日、串良に向かう時には、すでに森丘少尉、旗生良景少尉は出撃され、戦死されていきました。旗生少尉は京都大学出身で福岡出身、よく「おーい千、お茶にしてくれや」と言われていたそうです。

○ 特攻隊員の心情

徳島から串良へ移動する前の5月20日頃最後のお茶を点てられました。そのうち一人が「千よ、生きて帰ったらお前の所の茶室で茶を飲ませてくれよ」と言

いました。その時千氏はわーと思ったそうです。「俺たちは死ぬんだ。生きて帰ったらって、生きては帰れないのだ」と。そう思ったなら無性にお母さんに会いたくなり「お袋に会いてえな」と呟かれました。すると西村氏が一番に立って国の方を向いて「おかーさん」と叫ぶと、みんな立ち上がった。「おかーさん」と叫んでいたそうです。

「出撃する時白いマフラーをして笑って出て行きました。笑っているのではないですよ。泣き笑いですよ。苦笑いですよ。本当に笑っている訳ではありません。泣いているのですよ」

元特攻隊員であった千氏のお言葉は重いものでした。そしてこれが本当のお気持ちだと思いました。

「特攻はテロと同じ」と言う記者に対し、千氏は亡くなった戦友に代わって憤り「無差別に人を殺すテロと一緒にするな」と怒ったそうです。

向かってくる敵を倒さなければ家族が殺されると言う時「今安閑としているが敵が攻めてきたらどうしますか？逃げますか？家族を守るため敵に立ち向かって行く気持ちを持ちつつ事が日本人としての襟度だと思いません。特攻隊員は、俺が死んでもどうもならないかも知れないと思いませんが、向かってくる敵に対し戦ったの

です。テロじゃありません」と強く断言されました。

○ 平和を創る

千氏は出撃前に予科練生の訓練のため、忸怩たる気持ちの中、松山基地に転出、訓練をしながらも、特攻隊員への再度の命令が出るのを待っておられました。8月15日に無念の敗戦を迎えました。

千氏は戦後色々な所で慰霊の献茶をされましたが、沖繩の海上で献茶をした時は海底から千氏を呼ぶ声を聞いたそうです。

「その周辺に621柱の第14期飛行予備学生が眠っています。また多くのアメリカ兵それ以外の各隊から出た人たちも眠っています。陸にも多くの人たちが眠っています。此度の戦の多くの犠牲者の事を考えると、平和という事は本当に大事です。でも平和平和と空振りしてはいけません。平和平和と言いますが、本当の平和とは何ですか？本当の平和を自分の中から創って下さい。どんな人にも一椀のお茶をもって勧め合おうではないでしょうか。半歩下がる事が人間を和らぎにするのです。利休は「和敬清寂」と言う言葉を教えました。和し合うという事は好き嫌いを捨てなければならぬ、寛容こそ大事、寛容には忍耐辛抱が大事です。小中学生の皆さん、素晴らし

い未来のため、自分の心の中を見つめて下さい」と締めくくられました。

二 献茶式

平成29年8月19日(土) 鹿屋市小塚公園にある旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者慰霊塔前において、鹿屋航空基地から特別攻撃隊として飛び立たれた908柱の方々に、又、第2次世界大戦、彼我の戦没者の御霊に対し、鵬雲斎 千玄室大 宗匠による「鹿屋平和祈念献茶式」が執り行われました。

式次第

- 一 開式の辞
- 二 鹿屋航空基地儀仗隊・ラッパ隊
「捧げ銃」
合わせて「全員黙祷」
- 三 献歌 独唱「海行かば」
- 四 献茶の儀
- 五 千玄室氏挨拶
来賓挨拶
鹿屋市長 中西茂氏
海上自衛隊第一航空群司令
海将補 中村敏弘氏
- 六 電報披露
- 七 献花
- 八 鹿屋航空基地儀仗隊・ラッパ隊
「捧げ銃」
合わせて「全員黙祷」
- 九 閉式の辞

特別寄稿

鹿屋平和祈念献茶式

海上自衛隊第1航空群司令

海将補 中村敏弘

八月十九日(土)、鹿児島県鹿屋市・小塚公園にある旧鹿屋航空基地特別攻撃隊戦没者慰霊塔前において、鵬雲斎千玄室大宗匠ご奉仕による鹿屋平和祈念献茶式が海上自衛隊鹿屋航空基地所属隊員も支援して、意義深く執り行われました。

この平和祈念献茶式は、今年、鹿屋西ロータリークラブが創設40周年を迎えたことを記念した創設記念事業の一環で裏千家淡交会との共催で実施されたものです。

鹿屋の地は、先の大戦中、本土最南端海軍航空基地として多くの特攻隊員が飛び立った地であり、同戦没者慰霊塔には九〇八柱の御霊が祭られています。

献茶式には、中西茂鹿屋市長をはじめとする鹿屋市関係者、鹿屋西ロータリークラブ関係者、裏千家関係者に加え、鹿屋航空基地研修のため厚木航空基地より来鹿されていた米海軍第七二任務部隊指揮官ブライアン・エリクソン海軍大佐など約四五〇名が参列しました。また、鹿屋航空基地より儀仗隊及びラッパ隊を派

遣し、厳粛な式典になったものと考えます。大宗匠は、戦没者慰霊塔の前に設けられた点前座で二碗を謹点、一碗目を世界の恒久平和を祈念して捧げられ、二碗目を大宗匠と予備学生同期で特攻隊員であった「第5・七生隊」の故森丘哲四郎海軍大尉愛用のお茶碗で点てられ、ご遺族である名和まさゑさん(妹)及びその長女まどかさんと共に、特攻隊員をはじめとする先の大戦における彼我の戦没者の御霊に捧げられました。

その後、大宗匠は、「戦友の森丘哲四郎海軍大尉の遺愛のお茶碗でお茶を差し上げたとき、一羽のとんぼが低空でやって参りました。おそらく森丘大尉があの世から飛んできたのだらうと思います」と語り、「私は、一碗のお茶をもって世界平和の実現をささやかながらも目指しております。この献茶式を通じて、皆様も一碗のお茶を共に勧めあい、仲良く向き合う気持ちを広めてほしい」と挨拶されました(要旨は最後に添付)。その後、来賓の中西市長、小官の挨拶の後、参列者代表による献花で閉式しました。

閉式後は、小塚公園内に裏千家淡交会により呈茶席が設置され、参列者は出撃前に特攻隊員が機上で味わったという「海軍タルト」(鹿屋市内所在の菓子店

「富久屋」が今年再現)と呈茶を頂きながら、我が国のために若くして亡くなっていた特攻隊員へ思いを馳せていました。

なお、前日の十八日(金)午前、大宗匠一行が海上自衛隊鹿屋航空基地へ訪問して頂きました。二年前の「平和の和合」の折に大宗匠より寄贈して頂いたご自身愛用の短刀、軍刀及び帽子等を史料館にて見て頂いたほか、基地正門前に保存・展示してある「二式大型飛行艇」の研修もして頂きました。また午後からは、

鹿屋市教育委員会及び鹿屋西ロータリークラブ共催による「かのや未来創造プログラム・平和への花束2017」が鹿屋市内で開催され、大宗匠も参加されました。この催しは、世界平和を願う児童・生徒の平和へのメッセージを鹿屋から発信し、平和や人権について考えるとの趣旨のもと企画されたものです。第一部は、日本各地から応募のあった約三千点の中から小学生、中学生及び高校生部門の最優秀賞等の授賞式・朗読が行われました。第二部は大宗匠の講演会が実施され、「昔の家庭は、茶の間を中心の一つの物を分け合い、お先にどうぞと勧め合う感謝の心がありました。今はそれがありません。こんな小さなところから争いは生まれてきます。皆さんも自分たちの身

近なところから平和ということを考えてほしい」と述べられました。

私自身、この二日間を通じて、大工匠はじめ多くの方々と「世界の平和」を祈る時間が持てたことは何物にも代えがたい貴重な経験であり、言葉に尽くせない深い感銘を得ました。なお、今回の献茶式に在日米海軍指揮官の参列を得たことは、現在の海上自衛隊と米海軍との親密かつ良好な関係を内外に示すよい機会となったと考えます。

これから先も全ての戦没者の御霊に思いを巡らせ、海上自衛官として我が国の平和と独立をしっかりと守ることを更に強くした献茶式でありました。

【大工匠による御挨拶(要旨)】

『私が、この席に座りました時に、赤とんぼが群れをなしてやって参りました。おそらく、戦没の仲間が「おい」と呼びかけに来てくれたと思っております。この托杯で、戦没の方々のためにもう二度と戦(いくさ)が起こらない、本当の意味の平和が訪れることを祈念いたしまして、一椀のお茶を謹んでお捧げさせていただきます。アメリカも日本も世界各国で犠牲になられた方々の為に一椀のお茶を捧げさせていただきます。』

そして、戦友の森丘哲四郎大尉の遺愛の

お茶碗でお茶を差し上げた時に、一羽(いちば)のトンボが低空でやって参りました。おそらく、森丘哲四郎大尉があの世から飛んできた。私は一椀のお茶碗をもちまして、社会平和の実現をささやかでも自分の力でやらせていただいております。

この鹿屋市におきまして市長様始め、教育長、各地の関係の方々、また慰霊を守り頂く皆様方のおかげで本場にきれいに整備ができ、また鹿屋の航空基地隊、中村群司令をはじめ儀仗隊、ラッパ隊、それぞれご出勤頂きまして「国の鎮め」そしてまた、鹿児島大学の教授の素晴らしい「海行かば」のお歌で、私たちは胸を熱く致した次第です。この機会を通じてどうかみなさん、今日はセレモニーであります、本当の儀式、その中にも魂が込められております。どうか、一椀のささやかなお茶でも共に勧めあつて、お互いに仲よく生きあつてゆく、と言う気持ちでどうぞ一つ、この機会に一層強めて頂きたい。特に今日は厚木からも艦隊司令(注:正しくは第七二任務部隊司令)がおいでになって頂いて、大変ありがたく感謝に絶えない次第でございます。

どうか皆様方が、今後、皆様方のそれぞれのお立場におきまして一椀のお茶の

ご始末、大きな輪(和)の力を發揮していただきますれば大変ありがたく、心よりお願いする次第でございます。本当にありがたいございました。心から感謝に絶えない。私も94歳になりましたが、もうこれで私も「戦友達の元にいけるんかなあ」と言うふうには思っております。皆様方のご多幸ご健勝を祈りまして御挨拶とさせていただきます。色々ありがとうございました。』



お茶を点てる千玄室大工匠

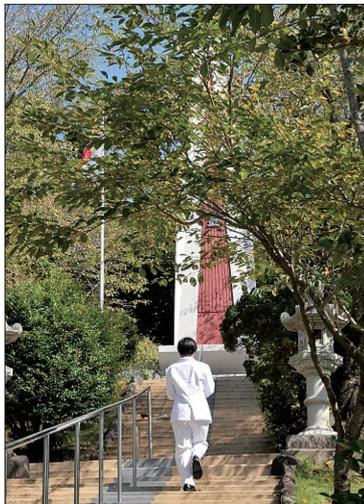


鹿屋航空基地ラッパ隊



鹿屋航空基地儀仗隊

慰霊塔足下へ献茶を運ぶ婦人自衛官



名和まさゑさん、同まどかさんと共に
献茶台に進む千玄室大宗匠

(写真提供：海上自衛隊第1航空群)

今月の世田谷山観音寺・特攻観音堂に
おける月例法要は、曇り空の中、太田賢
照山主も元気なお姿でご出席され、恵淳
ご住職を併せて、12名という参加者で行
われました。
法要はいつものとおり、「特攻平和観
音経」等を参加者全員で読経し、滞りな
く執り行われました。
会場を移しての直会は、法要間近に降っ
てきた雨が段々と激しくなり、激しい雨
音と雷鳴が鳴り響く中での直会となり、
10名の参加者で行われました。
本日の直会では、8月5日に行われる、
当顕彰会理事の白田智子講師による「陸
軍中佐佐井芳夫―父と母の生きた時代―」
と題した講演会のご案内に始まり、廣嶋
氏・呉氏による故飯田氏の話・聖路加病
院名誉院長、故・日野原重明氏の話・死
に方の話・世界遺産の話やらアルツハイ
マーの話・沖ノ島と出光佐三氏の話等々・
多種多様な話が飛び交う、いつにない直

<p>世田谷山観音寺 特攻平和観音月例法要報告 (毎月18日14時より境内特攻観音堂に 於いて、参加自由)</p> <p>平成29年7月18日(火) 月例法要 評議員 原島 淳子</p>

会だったと思います。俗に年の功とは申しますが、皆様々なことをご存じなのだ、感心するやら驚くやら、勉強になった直会でした。

直会の終わりには、激しい雷雨も治まり、また来月と散会いたしました。

雨の日になると「青空よりも雨の日が好き」と言う言葉を思い出します。これは、以前に読んだ特攻に関する本だっただけです。そこに書かれていた、女子学生の言葉です。雨の日が好き。何故だと思えますか？それは、雨の日ならば特攻機が飛ばないからだと思います。そんな思いが募った言葉でした。この女子学生に限らず、このように思っていた方は他にもいらしたことでしよう。本を読みながら胸が痛んだ事を思い出しました。

月例法要日の雨。雨の日は好きだと言った女子学生の事を改めて思い起こした本日の直会でした。

平成29年8月18日(金) 月例法要

理事 水町 博勝

今年太平洋高気圧が弱く、関東には北東気流の山背が入り、月初めから晴れる日のない空が続く、本日も猛暑は一段落、観音堂の記帳には十五日に四名の方が記され、三日前の終戦記念日の余韻も在りました。終戦と特攻を身近に思う法要



代官屋敷本坊

には十二名の参加でした。

直会は、衣笠専務理事の献杯より始まり、顕彰会会員八名、初参加等三名が紹介され、早速及川さんからパンフレット「特攻」が配られました。元理事の廣嶋さんからの紹介で初めて参加したお二人、高橋さんから「自分さえよければの風潮に、助け合う、犠牲を払う、日本の精神を伝えたい」石原さんから「八紘一宇・民族の絆がなく、個人主義、自虐志向、一方中国・韓国の我が国への態度、特攻精神を見直したい。」としっかり主張され、子供会の勉強の場を此処でと考えている様子でした。沖繩出身の佐倉さんは「沖繩戦に向かった特攻を思い、再度お

参りに」来ました。

大徳さんから、戦後に戦勝国の軍事裁判で戦犯にさせられ法務死した前田利貴陸軍大尉が刑の執行にあたって検事に要望した「検事に申出た最後の希望」と、それを讀んだ武者小路実篤の感想「世紀の遺書に寄す」の紹介が有り(双方とも本文末に掲載)、これに寄せて、大徳さんご自身の親友でA級戦犯で法務死した娘さんの思い出を語られたのには参加者一同、軍事裁判の不公平さ、敗戦の悲惨さと、刑に服するにあたってこのような軍人も居たのかとの感慨を新たにしました。続いて、最近、お嬢さんが日吉の慶応大で学構内の連合艦隊司令部地下壕跡を見学した折、本人がVサインをする写真を見せられ、思いの至らなさを論じたという紹介されました。空襲で壊滅状態の東京は軍の機能を秘密裡に掩体で分散した苦勞の跡です。父上||祖父は地下壕で終戦まで厳しい状況下で艦隊全軍に命令を発信していた。最高司令部跡での記念の写真でその姿はないと嘆かれたのです。

戦時の厳しさを知る者と戦後平和で危機感のない社会で育った世代の格差、戦跡をたどる時、往時の様子を残した写真等証拠を示し記念館の様に教えるしかないと思った。(知覧の平和会館はベ

私からは、二か月前、この場所で顕彰会の勉強会を行った。その一部資料の特攻隊関連年表と上級指揮官等の銘録を示し、一般の方にも終戦の時期に、大戦の記録を、世界の流れ、海軍・陸軍それぞれの動きを時系列で確認し、戦況の不利から派生した特攻を知ってもらおう。そして会の顕彰活動の一端を紹介した。

終戦に伴う指揮官の責任を自決等で残した遺書も、戦後の平和への願いを強くする。

恵淳和尚さん及び石井事務局長からは来月の年次法要の準備を万端に、当日直会での「つまみ」も注文があれば伺いたい旨紹介された。

昨年は激しい雨天が開始と共に一転好天になり、御霊のご加護と思えた。天候が定まらない今年、来月の年次法要の好天も祈る月例法要でした。 完

「検事に申出た最後の希望」

陸軍大尉 前田利貴

(昭和23年9月9日チモール島

クーパーンにて法務死 31歳)

1 目隠しをせぬ事

2 手を縛らぬ事

3 国家奉唱、陛下の万歳三唱

4 古武士の髪に香をたき込んだの

に習ひ香水1ビン

5 遺書、遺髪を送付

以上全部承認、当日私の決心は、自動車から下りたら、裁判長並びに立会者に微笑と共に挙手の礼をし、最後に遺留品として眼鏡を渡し、それから日本の方を向いて、脱帽最敬礼、国家奉唱、両陛下万歳三唱、合掌して海ゆかばの上の句を唱へ、下の句を奉唱し、此の世をば銃声と共に「はい左様なら」と言ふ順序に行

くつもりです。私の様な凡人に死の直前に歌が唄へるかどうか、之が最後の難問題だと思ひます。皆様に對し遺留品として糸、針、古新聞、本(馬來語)、マツチ、其の他手拭、歯ぶらし、衣類、なんでも申出に応じます。

「世紀の遺書に寄す」(一部抜粋)

武者小路 實篤

今度の戦争の犠牲者は何人居るか知らない。しかしそれ等の人の多くは自分の死を前知していた人は殆んどなく、遺書らしいものがあつてもそれは万一のことを考えてのものと思われる。しかし、死刑の宣告を受けた人の遺書は冷静に長い間死を凝視して書かれたもので、それだけ考えても慄然たるものがある。僕も時々自分が死刑の宣告を受けた時のことを想像して小説を書きたいと思う

ことがあるが、あまりに深刻で、それを想像するだけで参つてしまふ。その恐ろしい経験を空想ではなく、事実として経験した人々の気持ちはどんなものだったか、読むのさえ恐ろしい気がする。それだけその境における人間の生命力がいかに苦闘するか、その苦闘にいかにかに人間は耐えうるか、又克つたためにはどの位の努力がいるか、負ける時はどんな状態になるか、死を前に見た時の人間の姿程、凄

平成29年9月18日(月)月例法要
評議員 原 智崇

重陽の節句も過ぎ暦の上では秋とはなつたものの、また夏が帰ってきたかのよう

田谷山に向かった。当日は敬老の日ということもあり、また5日後に迫った年次法要の打ち合わせも開催されており、打ち合わせを終えた専務理事をはじめ顕彰会役員や甲飛喇叭隊隊員も数名参加して、参列者は17名を数えた。14時になり観音堂に於いて、恵淳和尚が導師をお務めになり太田賢照山主もご参会なさる中、9月の月次法要が執り行われた。静謐な堂内には外の暑さは届かない。参列者は皆、熱心に般若心経を唱え、続いて特攻平和観音経を奉唱した。この特攻平和観音経は太田賢照山主がお書きになったものと同っているが、特攻隊員の偉烈を短節に、そしてまっすぐに伝えており、読誦するたびに頭の中が整理され特攻隊員について、慰霊について、自らの中にあらためて落とし込まれて行く思いがする。やがて焼香が終わり、法要は終了した。

その後境内の代官屋敷と呼ばれる建物において、法要の直会が開かれた。今回は近所に住む若い男性が参加されており「特攻観音というのが祀られているのは知らなかった、今回は誘われて初めて訪れた。」そう慎ましく仰ったが詳しく話を伺ってみると別の神社でのご奉仕で以前一緒にしていることが判り、邂逅とお志を感じると共にまた特攻観音において、今後ご縁を深くしていただければ嬉

しいと感じた。直会の席上では金子編集長が鹿屋での献茶式と講話会に於ける報告をされていた。こちらは同じ会報に掲載されるとの事で内容を割愛するが、大変興味を引く内容だった。

続いて大穂顧問が以前出会われた方のお話をされた。顧問はご自分の時間を持てるようになってから、各地の慰霊祭へ足を運ばれるようになってきたが、慰霊祭の場を通じて福岡の小学校教員をされていたあるご婦人と知己になったという。その方のお兄様は軍艦矢矧で戦死されたそう、ご供養のため、やはり熱心に各地の慰霊祭へお出になっておられたのだが、ある年の「全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑追悼式」に参列した後に「私はもう、これで慰霊祭に参加しなくてもよくなつた。」と仰った。何故かと大穂顧問が問うと、「これまで数々の慰霊祭に参列しましたが、どちらでもおおよそ弔文は『英霊の皆様のお蔭で今の日本がある。ありがとうございます。』といった要旨でした。しかし今日の弔文では、『我が国は外国からの資源を止められた。これでは国家が成り立たなくなる。そういう考えから日本はあの戦争に進んで行つた。』と仰っていた。これで心に引っかかっていた疑問が氷解しました。納得しました。」と言われた。何のために自分の兄は命を擲つ

たのか、擲たねばならなかったのかと長い間考えておられたのが、ようやく解いたどり着いたのだという。世代は変わって行く。戦死された方の直接の遺族から、二世、三世と世代が進んで行く時期にこそ、「なぜ。何のために。」この部分への答えを見つけておくことが、我々の今後の慰霊と顕彰において大きな意味を持つのではないかと感じた。

最後に台湾出身の呉会員が、特攻隊を扱った作品をご覧になっての感想をお話しになった。呉会員はご自分の体験と重ね合わせて、「つくりもの」の映画や舞台で描かれる特攻隊員達に違和感を覚えて飛行機に乗ったあの時から、とうに覚悟は出来ていた。「そう淡々とお話しされた。描かれる特攻隊員達は葛藤し、出撃の前に苦しみ喘ぐ。「しかし、本当に特攻隊員に指名された仲間達は静かだったのです。嘆き悲しんだりはしていません。」訓練を受けている間も、ずっと心構えをしてきた。覚悟を積み上げてきた。「だから、『順番が来た』という感じ。達観していたんですよ。」これは一つのヒントになるのではないかと感じた。呉会員が戦時歌謡「バタバアの夜は更けて」をお歌いになり、直会は静かにお開きとなった。

会員投稿

第七二三海軍航空隊

神風特別攻撃隊彩雲隊

会員 森田 禎介

昭和二十年八月の終戦当時、私が所属していた 帝国海軍の最後にして最強の特攻隊なりと確信自負していた、わが七二三海軍航空隊について、ここにきちんと書き記したいと存じます。

私は、海軍兵学校七十期生でありまして、昭和十三年入校十六年卒業するや遠洋航海の夢は吹き飛び囂らずも日米開戦となりました。

私は、重巡洋艦羽黒の通信士としてスラバヤ沖・珊瑚海・ミッドウェー・ソロモン等の幾多の海戦を経験して、この日米決戦の勝敗を決するものは彼我の航空戦力なりと肌身に染みて確信しました。そしてその時幸いにも三十九期飛行学生を拝命し、時こそ至れり我こそはと念願の霞ヶ浦海軍航空隊へ勇躍入隊した次第であります。

一年間の飛行学生期間を修了、さらに練習航空隊で約半年研修後、ようやく第一線部隊へ転出、私は索敵を任務とする一四一空偵察第三飛行隊へ配属され、宮崎県都城を基地として、初陣の台湾沖航

空戦に参加しました。

十九年十月十日には南大東島付近で正規空母二隻を基幹とする敵艦隊輪形陣を発見打電、無事鹿屋に帰投しました。

その後沖繩・台湾經由、フィリピンのマニラに進出、ニコラスフィールドを基地としてフィリピン東方の太平洋の敵艦隊索敵を任務としておりました。

十九年十月二十五日は忘れもせぬフィリピン沖海戦の日です。この日、私は早朝午前三時発進、索敵飛行の任務に就き無事帰還しました。飛行高度三千メートルから眺める南国の満天の星空は、まさに宝石をちりばめたかのように美しい絶景で今でも忘れられません。

当時すでに戦局はきびしく制空権は敵の手にあり、我々の愛機も執拗な基地銃撃で破壊され、搭乗員は全員内地帰還となりました。

しかし、一四一空では、中村司令・軍医長・主計長以下私の愛機を徹夜で整備してくれた方々も全員、翌年のマニラ防衛戦で戦死されております。

翌二十年春、私は七十四期の飛行学生教官に転出、生死をともとと誓った。ペーアの小山中尉との辛い別れがありました。なお、小山中尉は沖繩戦に参加、四月二十二日喜界ガ島南方で戦死された旨を承り号泣、誠に無念でありました。

さて七二三空は二十年六月十五日横須賀空にて開隊しました。

当時、戦局は傾き、日本の主要都市はほとんど焼け野原の焦土と化し、B-29のみならず空母艦載機が連日来襲しておりました。

七二三空は来るべき本土決戦に備え、敵艦隊に痛撃を与えるべく、使用機は当時の最高速であり航続距離も断然トップの彩雲とし、搭乗員も練習航空隊で先輩搭乗員を育成していた歴戦のベテラン教官・教員のなかから選抜、百人を超える錚々たるメンバーが集まりました。昭和二十年当時では帝国海軍最精鋭のトップレベルであったと思います。

司令は青木大佐、飛行長中島中佐、飛行隊長は六十八期の村上俊博大尉と木村聰大尉、なお村上大尉は八月十日の敵機の機銃掃射で木更津空にて戦死されました。分隊長は四名で私が真つ先に突入すべき立場の第一分隊長を拝命しました。

(編集者注 集合写真の森田分隊長です) 七月訓練基地である木更津に移転し、彩雲は初めてというパイロットの習熟飛行から開始しました。彩雲は軽量で華奢な偵察機、これに爆弾に相当する重量の水タンクを装着しての離陸試験飛行等を重ね、二十年八月十二日神風特別攻撃隊彩雲隊の命名式の日を迎えました。

十九年秋のマニラ・ニコラスでは、司令官臨席のもとに総員集合、厳肅な特攻隊命名式が行われ、六十九期山田恭司隊長の堂々たる決意表明のご挨拶がありました。八月十二日はそのような行事はなく確か恩賜の酒を戴きました。

出撃命令を待つ私には故郷九州大牟田に住む母の顔が浮かびました。私は四人兄弟の末っ子で小学六年生まで母に抱かれて寝ていました。「禎介はコタツより暖かい」という母の言葉が嬉しかったな、だから俺が死んだら母が悲しむだろうな、しかし、いよいよ俺の順番が来たんだ。俺と仲の良かったクラスメートは皆戦死した。よし俺も真っ先に突っ込みお国のために立派に覚悟しました。

しかし十三日も十四日も出撃命令はなく、十五日総員集合いよいよと決意するも、意外にも終戦と。

何たることぞ、俺は死に遅れたか、生き残っては死んだ戦友たちに申し訳なし。それから数日は実に真剣な猛訓練、八月二十一日敵艦隊は四国沖を遊弋中と聞いて、司令以下徳島県吉野川の中州にあった徳島第二基地に進出しました。宿舎は近くの市場町にある大きなお寺でありました。

翌日これに慌てた司令部から「終戦は陛下のご意志なるぞ。特攻隊は即時解散

せよ。隊員は即時帰郷すべし」との強烈な命令があり。お寺の境内にある木立に囲まれた広場に搭乗員総員集合、別れを惜しむ暇もなく、呆然自失、滂沱の涙、解散帰郷を申し渡された次第です。

隊員の戦後

飛行隊士であった七十二期中川好成君は、戦後東京大学理学部に学び、米国のコロラド大学の物理学教授として活躍されました。

飛行士であった七十三期針ヶ谷英世君は医師となり、大宮赤十字病院で、格別の信望・名声を博されたと聞いております。

このように、兵学校出身者には戦後大が特色ですが、予科練出身者には、庭月野英樹君のように初心を貫いて航空大学の教官となり後輩を育成、その他戦後の辛酸を克服して企業経営者として成功された方が多いのが特色であります。学徒出陣の方々も学校長その他で活躍され、最高の文学賞を受賞した人もいると聞いたことがあります。

間一髪生命を拾った、わが七二三空搭乗員各位の戦後の生きざまと、各方面での活躍はまことに立派でありました。最後に謹んで運命の神様の格別のご配慮に感謝するものであります。

戦死された戦友諸兄にはまことに申し訳ない気持ちで生きてまいりました。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

付記 私自身の戦後（昭和二十一〜二十五年）について記すことをお許しください。

昭和二十一年、私は戦友の眠る太平洋と別れ難く、復員輸送に応募しました。そして、輸送船筑紫丸（大連航路の貨物船一万トン）の航海長となりました。

満州のコロナ島から引き揚げ輸送を何回もやりましたが、それはそれは悲惨な航海でありました。特に北満から必死で脱出してきた着の身着のまま、中国孤児と呼ばれた子供たちの姿は可哀想で正視できない悲しいものであります。

昭和二十二年春には、ラバウルの最終復員輸送に参りました。ポートモレスビーに寄港して燃料補給後、ラバウル入港、祖国を遠く離れ、熱帯瘴癘しょうれいのソロモンで苛烈な戦争幾歳か、祖国への帰還を一日千秋の想いで待ちわびていた二千数百人がどっと乗り込み、忽ち溢れんばかりの満船となりました。（瘴癘＝熱病のこと）

数日の航海の後、船はようやく日本近海へ、夜明けとともに伊豆諸島付近に差し掛かった時、朝もやの中から雪をいただいた富士山がまさに忽然と奇跡のようにパツと顔を出してくれました。

とたんにデツキに鈴なりの全員がどよめき、やがて全員が慟哭、一万トンの巨船がその感動を喜びで、うち震えました。夢にまで見た祖国に、生きて帰還することが出来た幸せを実感したのであります。

昭和二十五年の春、復員輸送もほとんど終了し、私はアメリカから借用していたリバイ船を返還するため十数隻の船団を組み横浜港を出発、アメリカ北西岸へ向かいました。

アリューシャン列島付近は、有名な海の難所。空船・低速の船団は猛烈な風と荒波に木の葉のように揺れ、三週間かかって漸くシアトルの沖へ到着しました。そこからさらにシアトル湾の奥地へ進み、ワシントン州の州都オリンピアの港にたどり着きました。

焼け野原で真っ暗になってしまった日本の夜とは正反対で、オリンピアの街全体が煌々と光り輝いておりました。

岸壁のすぐ側の公園では、老いも若きも歓声を上げて、メリーゴーラウンド等を楽しんでおり、アメリカは桃源郷ならずや、まさにパラダイスならんと驚嘆した次第です。しかも現地の日系人の方々から、衣類や現金の入ったご親切な有難い慰問袋を頂き、感謝感激、上陸も自由

で、私は毎日キョロキョロと市内を歩き廻り、美しい金髪女性に道を聞けば丁寧に教えてくれ、とたんに君子豹変アメリカという国が大好きになりました。

このままアメリカに残りたいという気持ち日が日々強く募りましたが、実行に移す勇氣と決断力がなく、後ろ髪をひかれる想いでオリンピアの街に別れを告げ日本へ帰国した次第です。

帰国した私の新配置は、米空軍の航空機救難艇「クラッシュボート」の「スキッパー」(艇長)でありました。

クラッシュボートは五十トンくらい的小型船ながら高速、乗組員はアメリカ兵十名と日本人船員十名計二十名でありました。

そのうちに朝鮮戦争なるものが始まり、対馬の比田勝港を基地として、玄界灘を三十〜三十五ノットのフルスピードで走り廻り、不時着米軍機のパイロットを救助するのが、わが任務となりました。

どういふわけか不時着機は意外と多く、米空軍救助スタイルは、人命第一、人命尊重は実に立派で羨ましい限りでありました。

不時着するかもという飛行機からの第一報が入ると、即刻基地から大型救難機が離陸発進して、不時着予定機の方に向

かいます。不時着した地点には直ちに救命ボートや発煙筒を投下し、直ちに比田勝港を発進してフルスピードで救助に向かつている、わがクラッシュボートの航路誘導に来てくれます。

私が一番驚き感心したのはアメリカ兵の態度です。最初の頃、私はアメリカ兵はなんかのんびりしているような印象を持っていました。ところが実戦となり救助命令が発動され、基地を発進したとたんに、態度は一変して全員が真剣そのもの、不時着地点に到着し機体を発見するや、水深5mでも10mでも先を争って海に飛び込んで救助に命がけて頑張ります。実に立派で私は感服しました。

不時着地点は島の近くの浅瀬が多く、間一髪パイロットを助け出すことに成功したこともありました。パイロットを収容して博多港のポンドへフルスピードで突っ走るのは、二十五年の夏は、毎日上半身素っ裸で玄界灘を走り廻っていたので、確かひと夏で三回背中が剥けた変わつた記憶があります。

終戦時、満二十四歳。現在九十六歳若かりし日が懐かしい今日です。

最後に祖国の為に水漬く屍となられた方々にまことに申し訳なくご冥福を心からお祈り申し上げ、拙文を終わります。

723空搭乗員の記念写真



前2列3人目から

分隊長	金子成	大尉	海兵72期
分隊長	菅篠	大尉	操練17期
分隊長	岩井 愷三	大尉	海兵70期
隊長	木村 聰	大尉	海兵68期
飛行長	中島 正	中佐	海兵58期
司令	青木 武	大佐	海兵51期
隊長	村上 俊博	大尉	海兵68期
分隊長	森田 禎介	大尉	海兵70期
分隊長	秋田	大尉	(不詳)
分隊長	中山 皎	大尉	海兵72期
飛行隊長	中川 好成	大尉	海兵72期

海軍特別攻撃隊第5七生隊
「森丘哲四郎手記」余聞
理事長 藤田幸生

御遺族の名和まどか様から、お便りを頂きました。
それは、お知り合いの弁護士、森田重樹氏からの、以下の読後所見であります。
ご本人の了解が得られたので、ご紹介させていただきます。
『森丘哲四郎手記を読ませて頂きました。
昭和15年〜20年頃の青年達は、どうしてこれだけ「孝養を尽くす心」「家族を思う心」「大和島根を思う心」で満ち溢れていたのか、そんな精神性はどのように育まれたのかと想像を絶する思いです。
森丘様の手記で、印象に残るのは、やはり「小林治子さん」(562, 563ページ)についての思いを記載された箇所、ご両親や国を思う3月23日欄(566, 567ページ)あたりです。(しかし、このような製本された手記になると、哲四郎様も予想だにしないことで、原文につき名和様らの解読の努力の後も見取れます。)
当時、哲四郎様は純粹な気持ちで治子さまを慕っておられた。その心は恋心でありましようが、邪心無く、むしろ「異

性への憧れ」と言った方が適切かも知れませんが、私自身、20歳過ぎの青年時代における異性への憧れの心情を思い起こすとき、そのような憧れの人に告白もできず、「然し、之は私だけの考えであり想いであります故」と、熱い思いを内に秘めたまま大君と国のために宿命を背負って逝かれた心を、私なりに追憶いたします。

当時の特攻隊員は、

「身は一度南海に散りぬるとも、魂魄は永久に皇国を護らん」（金子正男少尉）との思いで鹿児島地から飛び立ちました。不幸な歴史ですが、哲四郎様をはじめ彼らを英霊として尊崇の念を持つべきは当然です。

私たちは、まさに「お陰様で、」今の時代を生かされているのです。

どうぞいつまでも哲四郎様の御霊を慰霊下さるようお願いし、簡単ではありますが、お礼に代わる感想として記載し、かく筆いたします。気持ち程度にお礼の品を同封します。

早々 『
として、お線香が、送られてきたそうです。

合掌

「森丘哲四郎手記」の紹介

本書は、特別攻撃隊員として散華された、海軍予備学生の日誌（大学ノート九冊分）を、忠実に掲載し、「海軍特別攻撃隊第五七生隊 森丘哲四郎手記」として、公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会から、出版されたものです。

森丘大尉は海軍予備学生第十四期生として、昭和十八年十二月に東京農業大学から海軍に入隊、昭和二十年四月二十九日、特別攻撃隊戦闘機操縦者として鹿屋基地から出撃、沖縄北端東方海域で散華された特攻隊員です。

戦後七十年を過ぎ、近年に出される特攻に関する著書、演劇、映画、ドラマ、小説等多くありますが、それには現在の世相が色濃く反映されており、真実が薄れてきているように伺えます。ここに、ご遺族から、鹿屋史料館に寄託された貴重な真実本物の手記が、あります。御遺族のご好意により、この手記が発刊されたものです。
森丘大尉の同期生であった茶道裏千家千玄室大宗匠（本名・千政興）から追悼文が、寄せられております。
いま、これだけ文字通り赤裸々な手記が

残っていたのは稀有な事であり、特攻隊員の真情を伝え知る一級の資料であると考へ、これを永久に残すべきであると考へました。

特別攻撃隊の真実を後世に伝える史料として、是非ご一読下さることをお薦め申し上げます。

なお、本書は、国会図書館、各県、各地方自治体等公立図書館、自衛隊幹部学校、候補生学校、術科学校等、関係各部に寄贈されました。

また、本書は、一般書店では販売していませんので左記に申し込めば、一冊3,000円（送料別）で頒布されております。

（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会事務局

〒102-0073

東京都千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内

TEL 03-5213-4594

Fax 03-5213-4596

Eメールアドレス:

tokuseniken@tokkotai.or.jp

URL <http://www.tokkotai.or.jp>



千玄室大宗匠と名和まさゑ様 (名和まどか様提供)

特攻隊員を追い悼む

その5

蒼蒼子

前四回にわたり、特攻隊関連の所見を披露したが、引き続き特攻隊に関連した記事を紹介したい。

筆者は昭和35年に航空自衛隊の飛行教育課程に進み、以降37年間操縦の道を歩んだ。35年当時のレシプロ機の操縦教官は旧軍の操縦者が多数活躍しておられた時代であり、戦争体験と言う独特の雰囲気有する方が多かった。T-34型機で最初の教育を受けたわけであるが、フライトコマンダーは「ノモンハンの勇士」として著名であった西原五郎さんで、操縦には厳しい反面、官舎に夕食を招待される等人情味溢れる先輩であった。数々の教示を頂いたが、中でも「もっともつと飛行機の事を勉強せよ。知識に勝る戦技はない。」と半ば叱られた記憶が今でも浸みわたっている。特攻攻撃については否定的で、「もつと考え抜いたやり方があったはず」と言われたのを覚えている。

核操縦士としていささか自信過剰となるころ、幹部学校普通課程に入校した。導入教育のあと、最初の教科は、「指揮・統率」。戦史上の実例を提示、所見文を提出、内容を議論するものであった。出された実例はポートモレスビー作戦(PM作戦)での航空攻撃であった。米豪軍のレーダー防空網厳しい中、攻撃成果はかばかしくない。制空戦では新鋭機零戦の威力、台南空三羽鳥と言われた坂井・西沢・太田飛曹長の活躍があり、戦果は上がるものの、爆撃機・攻撃機の攻撃は苦戦であった。そんな中、高級指揮官の現地進出、督戦があり、現地部隊は全力を挙げて出撃する。ところが好事魔多し、あいにくの荒天で出撃が憂慮される状況。部隊は気象状況によっては中止覚悟で出撃する。経路は通常と異なり、悪天候のニューギニア西海岸を避け、スタンレー山脈を北から横切る経路で強行する。攻撃機にとつて4000メートルの山脈を超えるのは性能限界に近い。戦闘機隊も上空を密雲に抑えられ山頂ぎりぎりを飛ぶ。幸運にも山頂がかるうじて視認できる状況に恵まれ、山脈南斜面を滑るようさかの油断を突いた奇襲となり、大戦果を挙げる。・・・

学校側の原案は「指揮官現場進出の重要性」にあり、呼応し奮い立つ前線部隊



中島正少佐
(戦後 航空自衛隊に入隊)



坂井三郎



西澤廣義
1944年10月26日戦死



太田敏夫
1942年10月21日戦死

の士気と相俟ち、「指揮統率」の原点であるとするものであった。討議も終了に近いころ、筆者は噛みついた。要旨は、指揮官現場進出の重要性は十分認識する。

しかし、何故成功したのかもつと深く検討すべきであった。おそらく、山頂ぎりぎりまで飛行した事から、レーダー探知を受けなかった可能性が高い。現場の戦場心理としても、少なくとも戦果を挙げた同じ方法で攻撃を繰り返す必要があったのではない。地表面ぎりぎりまで飛行して相手のレーダー探知を避けることができればその後の航空作戦は様子の変わったものになったのではないか。その後も米豪側

のレーダー探知網に苦戦を重ねた事を考へれば、対応策は早期に確立出来たのではないかと言うものであった。当時は、バッジシステム(自動管制)導入直前の手動管制全盛時代、多くの要撃管制官が養成され課程同級生にも10名程度が机を並べていたが、彼らも強力に賛同し、学校原案プラスアルファの結論となった。坂井三郎さんの「大空の侍」によれば、ラバウル・ニューギニアに進出した台湾空は、新鋭機ゼロ戦の威力もあり、戦闘機隊は活躍する。前述の坂井さん以下の三羽鳥が、3機編隊でPM飛行場で3回宙返りを行って、これ見よがしの挑発飛行を行った余裕ある時期であった。反面陸攻部隊は、爆装の重量から高度的に苦しい脊梁山脈超えを避け、海上からPMに向かい、レーダー探知を受け厳しい要撃を受けていたのである。その後の海軍航空部隊の戦闘振りは、基本的に中高度から敵艦艇発見を重視して接敵するのが主流であり、レーダーと目視の差を見せつけられる事と成った。特攻攻撃においても、制空戦闘機隊を先行させ、特攻機はそのあと、敵脅威の少ない状況を期待して進入すると言う真つ向勝負の作戦が多かったようである。結局レーダー情報、作戦機数の双方が上回る米軍の有利な迎撃戦に終始した。海軍航空出身の大先輩が、「航空戦は、



ポートモレスビー進攻図

(編集者注)
その1〜3は95〜97号、その4は99号に掲載

米国のレーダー網と、近接信管に対応する方策が確立できず惨敗した」と述懐しておられたが、組織的な戦術戦法の開発が大きな問題であった。この様な反省から、自衛隊の創設にあたっては、防衛大を理工科大学にする等、自然科学重視の方向へ進んだのも合点できるところである。それにしても西原さんの「知識に優る戦技は無い」の言葉が思い出される。

蒼蒼子

顕彰会講演会
「父と母の生きた時代」に参加して
 評議員 及川 昌彦

平成29年8月5日(土)、臼田智子理事による講演が靖国会館九段の間において開催されました。特攻に関する資質向上の為、これまで特攻隊の生存者による講演や聞き取り作業を実施してまいりましたが今回初めて特攻隊の遺族による講演です。

臼田理事は知覧から出撃した最年長(32歳)であった伍井芳夫陸軍中佐の次女です。特攻隊の遺族としての心情と戦後の苦難について講演いただきました。旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の跡地の保存整備状況についての報告もあり「東の知覧」としての意気込みを披露されました。その後活発な質疑応答があり閉会後は偕行社3階談話室にて懇親会を開催しました。毎日新聞の記者も参加しており8月12日の朝刊に掲載されました。

今月5日、靖国神社で開かれた講演会に臼田智子さん(73) 埼玉県桶川市 〓の姿があった。父は知覧の特攻第1号だった第23振武隊長、伍井(いつい) 芳夫さん。知覧の特攻では最年長の32歳で亡くなった。山近代表が研修でも紹介している。

約30人を前に演壇に立った臼田さんは、父が特攻作戦に反対していたことを司令官の遺族から聞いたと明かし、「時代が行かせたのだと思う」と語った。母は出撃を知って乳が出なくなり、生後8カ月で長男を亡くした。戦後は「家族を守るために行った」と語られるのを嫌い、知人への手紙に「足がなくなり、手がなくなっても帰ってほしかった」とつぶつた。

臼田さんは特攻が遺族の悲しみをよそに語られることが増えたと感じている。半面、覚えていてもらえるなら、それでもいいと思うこともある。「きちつと伝えようと思っても伝わらない。それが72年の月日なんでしょう」



事務局からの報告等

会報『特攻』第116号正誤表次のとおり誤りがありましたので、謹んで訂正し、お詫び申し上げます。(訂正箇所)

- 2頁2段目 誤 公益財団法人 隊友会
- 正 公益社団法人 隊友会
- 40頁2段目 誤 記念館
- 正 祈念館
- 47頁1段目 誤 講師 奥村康大氏
- 正 4 講師 奥本康大氏
- 47頁3段目 誤 寄付者御芳名(敬称略)
- 正 (平成29年1月1日～3月31日)
- 誤 新入会員名簿(敬称略)
- 正 (平成29年1月1日～3月31日)
- 誤 新入会員名簿(敬称略)
- 正 (平成29年4月1日～6月30日)

入会者のコメント

八月に当頭彰会のホームページから入会されました井上様のコメントを紹介いたします。

井上誠行 (No. 92726)

私の出身高校である米子東高等学校は、旧制米子中学校です。この米子中学校出身で、海兵68期の山下 博中佐がおられます。

昭和20年4月6日、第一八幡護皇隊(艦攻)で特攻散華された先輩です。作家の故豊田穰氏と海兵同期でした。

私は若い時に豊田氏の作品を読んで、山下中佐の事は知っていましたが、結婚して妻の実家の法事に行ったとき、妻の実家檀那寺に 山下中佐の墓石を見つけて大変驚きました。

それ以来、山下中佐の後を追いかけて、江田島、海上自衛隊鹿屋基地、突入されたと言われる中城湾も訪ねました。地元の陸上自衛隊米子駐屯地の資料室にも山下中佐の資料があり、子供を連れて見学させていただいたこともあります。

朝雲紙上を通して、貴会とご縁を頂いたのも、山下中佐のお導きかもしれません。よろしくお願いいたします。

寄付者御芳名(敬称略)

(平成29年6月1日~9月30日)

(単位千円)

一〇〇	山根 秋男	一〇〇	呉 奈々子
二〇	降矢 達男	一〇	館本 勳武
一〇	松本 司	一〇	大穂 利武
九	紺野 邦男	七	河島 慶明
七	萩原 健一	七	臼田 智子
七	波多野 義昭	七	加藤 智拓
七	竹本 佳徳	五	飯田 雍子
五	丸原 巧	五	杉原 清之
五	作左部 貢	五	外海 信雄
五	下森 康玄	五	齊藤 達人
五	松田 栄	五	加藤 千佳
四	羽瀨 徹也	三	谷垣 尚
三	近藤 敬子	三	江副 保次郎
三	吉野 信二	三	安藤 佐智子
三	福島 隆夫	二	関根 賢治
二	陸軍 桶川飛行学校		
二	原田 義治	二	吉田 治正
二	川田 久四郎	二	服部 武志
二	植田 和男	二	佐伯 トシ子
二	呉 正男	二	清水 典郎
二	長谷川 知幸	二	岩井 良平
二	水野 清	二	中村 博志
二	小倉 利之	二	衣笠 陽雄
二	須田 里吉	二	佐藤 義信
二	山口 高治	二	長堀 守利

新入会員名簿(敬称略)

(平成29年6月1日~9月30日)

一	上畑 幸晴	一	渡辺 由佳
一	渡辺 里佳		
北海道	成田 直人		
福島	長嶺 靖		
茨城	三宅 佑季子		
埼玉	加藤 勉		大沼 稜
千葉	小林 博史		
千葉	小松崎 幸弘		
東京	佐々木 俊夫		馬場 しづ子
東京	宮本 雅史		澤 知樹
	熊本 ちづる		野方 敏博
	榎 源太郎		西尾 彰秀
	湯村 秀行		中野 みさ子
神奈川	中野 哲史		吉田 三郎
	鈴木 成一		増田 眞理子
	三沢 絵里子		三枝 康悦
富山	与三井 愛		
京都	大槻 敏彦		
鳥取	井上 誠行		
島根	福田 裕和		永島 望
岡山	藤原 一雅		

会員訃報(敬称略)

謹んで哀悼の誠を捧げます

宮城 佐藤 孝一 (29・4・6)
福島 佐藤 幸子



大熊福	大京愛静	神奈川	東千	埼
分本岡	阪都知岡		京葉	玉
身高平星松西尾伊小大猪大佐下小谷新金	深岡松埜沢本関藤林山山侯川藤藤出林脇水古			
一正照清孝光尾伊小大猪大佐下小谷新金	朔雄雄滋春進基明次達三健成達憲充			
(28)	(29)	(29)	(29)	(29)
・9	・1	・6	・2	・8
・9	・29	・7	・3	・6
・9	・7	・13	・8	・9

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」
 当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のこととは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <http://www.tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段18字詰めをお願いします。又原稿は、可能ならばメールで頂ければ幸いです。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等により一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。
- 3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。必要な場合はその旨お書き添え下さい。
- 5 会報・機関紙、投稿記事等の送付先は、左記宛として下さい。

〒102-0073
 東京都千代田区九段北3-1-1
 靖国神社遊就館内
 公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
 電話 03-5213-4594
 FAX 03-5213-4596
 E-mail tokuseniken@tokkotai.or.jp